

高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第6集

西土佐地区土地改良総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

車 木 遺 跡

2001.3

高知県幡多郡西土佐村教育委員会

高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第6集

西土佐地区土地改良総合整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

車木遺跡

2001.3

高知県幡多郡西土佐村教育委員会

卷頭図版 1



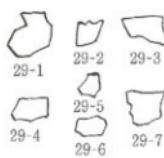
A-1区B面土層堆積状況



A-1区A面土層堆積状況

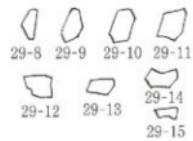


車木遺跡出土前期縄文土器
(上段外面、下段内面)





車木遺跡出土前期縄文土器
(上段外面、下段内面)



卷頭図版4



車木遺跡出土石錘
(上段表面、下段裏面)

○ ○ ○
31-1 31-2 31-3
○ ○ ○ ○
31-4 31-5 31-6 31-7

序

西土佐村は、四国西南部に位置し、日本最後の清流四万十川が中央部を流れており、水と緑にかこまれた自然豊かな山村で、31の集落が散在しています。本流及び支流沿いに発達した耕地では、補助事業を導入しながら基盤整備を進めてきたところです。

平成10年度から県営土地改良総合整備事業を導入し整備を進めていましたが、平成12年5月上旬工事により、大量の土器片等が確認され、緊急発掘調査に至ったものです。

今回の調査では、アカホヤ火山灰土層中に羽島下層式・轟B土器片と石錘が出土し縄文前期に網漁の行われていたことが確認されました。

地域の歴史を解明する上でも、貴重な成果があったことを確信しています。

この調査、報告書作成に際しましては、終始学究的情熱を傾けていただき、全面的にご協力をいただきました日本考古学協会会員木村剛朗先生に衷心よりご感謝申し上げます。

報告書につきましては、今後の縄文時代研究のうえでも大変貴重なものになることを確信し、今後における教育・研究の一助となることを期待するものです。

また、村民の皆様が文化財に対する一層のご理解と親しむきっかけになればと願うものです。

最後になりましたが、文化庁、高知県教育委員会文化財保護室の深いご理解によつて刊行できますことに心から感謝とお礼を申し上げ、ごあいさつといたします。

平成13年3月

西土佐村教育委員会教育長 清水忠孝

例　　言

1. 本書は高知県幡多郡西土佐村下家地地区で平成12年度に行なったは場整備事業に伴う緊急発掘調査の記録である。
2. 本書の執筆は第1章～第6章まで木村剛朗が担当した。
3. 本書を作成するに当たり、編集は西土佐村教育委員会社会教育係長朝比奈雅人・社会教育係主幹浦宗康が行った。
4. 発掘調査に際して、測量を西土佐村国体室係長芝正司が、遺物の記録と遺構の測図を木村剛朗・今城宗久・浦宗康が行った。
5. 現場写真と遺物出土状態の記録写真については浦宗康が、遺物写真は木村剛朗が行った。
6. 遺物の整理は木村剛朗・今城宗久が当たり、その実測図作成については木村剛朗が行った。ただし、石器については多田仁（愛媛県埋蔵文化財調査センター）氏の協力を得た。
7. 中世・近世の遺物について、その鑑定を財高知県埋蔵文化財センターの浜田恵子氏に受けた。
8. 当遺跡出土遺物並びに記録資料は、西土佐村教育委員会で厳重に管理、保管されている。
9. 本調査に当たっては高知県教育委員会文化財保護室、財高知県埋蔵文化財センターの皆様方にご協力をいただいた。ここに銘記し感謝の意を表する次第である。

目 次

卷頭図版

序 文

例 言

第1章 序 説	1
(I) 遺跡発見と発掘調査に至る経緯	1
(II) 調査の組織	2
第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第3章 遺跡及び調査の経過	11
第4章 層序と遺物出土状況	22
第5章 遺構と遺物	35
I. 遺構	35
(a) A-2区検出の集石遺構	35
(b) A-4区検出の集石遺構	35
II. 遺物	35
A. 中世・近世の遺物	35
B. 縄文時代の遺物	40
1. 土器	43
(a) 無文土器	43
(b) 刻み目文土器	43
(c) 条痕文土器	43
(d) 刺突文土器	46
2. 石器	46
(a) 石鎌	46
(b) 楔形石器	48
(c) 石錘	48
(d) 打製石斧	48
(e) スクレイパー	51
(f) 叩石	54
(g) 石材核	54
(h) 石皿	58
(i) 第2~3層出土の石器剥片	58
第6章 考 察	66

挿 図 目 次

第1図 発見当時の車木遺跡	1
第2図 車木遺跡の位置と西土佐村の縄文遺跡分布図	4
第3図 四国西南部の主要後期旧石器・縄文遺跡分布図	8
第4図 車木遺跡地形図と発掘調査区	12
第5図 A-1区の発掘調査着手光景	14
第6図 地元の中学生、担任教諭参加の発掘調査体験学習光景	14
第7図 A-4区の発掘調査光景、手前は大型石皿の出土状況	15
第8図 A-1区の第2層アカホヤ火山灰土層に出土の遺物	15
第9図 人頭大円礫と石器剥片出土状況	16
第10図 地元の小学生による見学と今城宗久調査員の説明光景	16
第11図 A-2区の集石遺構出土状況	18
第12図 A-1区の最下層確認掘り下げ状況	18
第13図 A-3区に出土の姫島産黒曜石剥片	19
第14図 A-4区アカホヤ火山灰土層下部への掘り下げ作業光景	19
第15図 調査成果の報道記者会見光景	21
第16図 発掘調査完了光景	21
第17図 車木遺跡調査区地層断面実測図	23~24
第18図 A-1区出土遺物垂直・平面分布図	25~26
第19図 A-2区出土遺物垂直・平面分布図	27~28
第20図 A-3区出土遺物垂直・平面分布図	29~30
第21図 A-4区出土遺物垂直・平面分布図	31~32
第22図 A-1区に出土の自然礫出土分布図	34
第23図 A-2区検出の集石遺構実測図	36
第24図 車木遺跡A-2区検出の集石遺構礫実測図	37
第25図 車木遺跡A-4区検出の集石遺構実測図	38
第26図 車木遺跡出土中世・近世の遺物実測図	41
第27図 車木遺跡出土近世の遺物実測図	42
第28図 車木遺跡出土土器拓影	43
第29図 車木遺跡出土土器拓影	44
第30図 車木遺跡出土石器実測図	47
第31図 車木遺跡出土石器実測図	49
第32図 車木遺跡出土石器実測図	50

第33図	車木遺跡出土石器実測図	52
第34図	車木遺跡出土石器実測図	53
第35図	車木遺跡出土石器実測図	55
第36図	車木遺跡出土石器実測図	56
第37図	車木遺跡出土石器実測図	57
第38図	車木遺跡出土石器実測図	59
第39図	鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah)の等厚線図	67
第40図	四国西南部の縄文前期遺跡分布図	69
第41図	四国西南部縄文期の姫島産黒曜石出土遺跡分布図	70
第42図	南四国縄文期の石錐出土遺跡分布図	71
第43図	四国西南部における縄文期の石皿出土遺跡分布図	73
第44図	十川駄場崎遺跡検出の集石遺構	74

付 表 目 次

第1表	西土佐村の遺跡名一覧表	5
第2表	車木遺跡A-2区検出の集石遺構蝶観察表	39
第3表	車木遺跡出土土器観察表	45
第4表	車木遺跡出土石器観察表	61
第5表	車木遺跡出土石器観察表	62
第6表	車木遺跡出土石器観察表	63
第7表	車木遺跡出土石器剥片観察表	64
第8表	車木遺跡出土石器剥片観察表	65

写 真 図 版 目 次

PL. 1	(1)車木遺跡全景、(2)A-1区最深部掘り下げ状況	1
PL. 2	(1)A-1区C面土層堆積状況、(2)A-2区A面土層堆積状況、 (3)A-4区A面土層堆積状況	2
PL. 3	(1)A-2区第2層の集石遺構、遺物出土状況、(2)A-4区に残る畦	3
PL. 4	(1)A-2区第2層に検出の集石遺構、 (2)A-4区第2層に検出の集石遺構と石皿出土状況	4
PL. 5	29-7、深鉢胴部片出土状況、(2)A-2区土器出土状況	5
PL. 6	(1)29-3、深鉢口縁部片出土状況、(2)29-11、深鉢胴部片出土状況、 (3)29-1、深鉢口縁部片出土状況、(4)29-13、深鉢胴部片出土状況、 (5)29-4、深鉢頸部片出土状況、(6)27-13、擂鉢口縁部片出土状況	6
PL. 7	(1)36-1、石材核出土状況、(2)32-6、スクレイパー出土状況	7
PL. 8	(1)34-4、叩石出土状況、(2)31-5、石錐出土状況	8
PL. 9	(1)33-5、スクレイパー出土状況、(2)30-1、石錐出土状況、 (3)30-9、石錐出土状況、(4)姫島産黒曜石剥片出土状況、 (5)32-3、打製石斧頭部残片出土状況、(6)30-8、石錐出土状況	9
PL.10	(1)A-1区石器剥片出土状況、(2)A-2区石器剥片出土状況、 (3)19-2、石器剥片出土状況、(4)19-8、石器剥片出土状況、 (5)18-3、石器剥片出土状況、(6)32-7、スクレイパー出土状況	10
PL.11	(1)18-8、石器剥片出土状況、(2)A-1区石器剥片出土状況、 (3)18-4、石器剥片出土状況、(4)21-6、姫島産黒曜石剥片出土状況、 (5)19-12、姫島産黒曜石剥片出土状況、(6)A-1区姫島産黒曜石剥片出土状況	11
PL.12	(1)調査区完堀状況、(2)調査区完堀状況	12
PL.13	近世の遺物	13
PL.14	中世・近世の遺物	14
PL.15	縄文土器片（第3層出土）	15
PL.16	石錐（第2～4層出土）	16
PL.17	石錐未製品・楔形石器・スクレイパー	17
PL.18	打製石斧（上段・第4層出土、中・下段・第2層出土）	18
PL.19	打製石斧（第2層出土）	19
PL.20	スクレイパー（上・中段、第3層出土）	20
PL.21	スクレイパー（上段・第3層、下段・第2層出土）	21

PL.22	スクレイパー（第2～3層出土）	22
PL.23	叩石（第2層出土）	23
PL.24	姫島産黒曜石剥片（上段）、サヌカイト剥片（下段）	24
PL.25	石材核	25
PL.26	石材核	26
PL.27	石材核	27
PL.28	石材核	28
PL.29	A-1区第3～4層出土石器剥片	29
PL.30	A-2区第3～4層出土石器剥片	30
PL.31	A-3区第3～4層出土石器剥片	31
PL.32	A-4区第3～4層出土石器剥片	32
PL.33	A-4区第2層出土石皿	33
PL.34	発掘調査に携わった皆さん	34

第1章 序 説

(I) 遺跡発見と発掘調査に至る経緯

平成12年5月7日に木村剛朗は、西土佐村文化財保護審議会会長今城宗久氏より西土佐村下家地地区のは場整備現場にて完形の打製石斧を含む多数の石器剥片を表採したとの報を受けた。その時の説明によると、今後、この場所は更に広範にわたって深く掘削されるとのことを知られた。それが実施されれば大規模にわたる遺跡の破壊は必至で、早急に何らかの方法を講じなければと考え木村は翌日、現地へと急行し現場をつぶさに視察した。

これによると、田泥土は既に全面にわたり削除されて片隅に山積みされ、地表面にはアカホヤ火山灰土が広くむき出しとなった状態で、その面に縄文期の遺物が露出散在していた(第1図)。これらの状況と、は場整備による工事が急ピッチで行われている事などを合わせ、本遺跡については緊急に調査する必要性を痛感し、以下の組織を結成して発掘調査の実施に踏み切ったのである。

本地点は今城氏による日頃の遺跡踏査によって偶然見つけ出された新遺跡である。今城氏が発見していないければ、本遺跡は全面破壊され世に出ていなかつたはずである。その意味から氏による今回の発見は、高く評価されなければならないであろう。

今城氏が発見した場所は既述のとおり新発見による所であるが、実は、当遺跡の西側に家地川を挟み車木遺跡(縄文後期、中・近世)として既に登録された遺跡が所在する。この場所は字クルマキダバ7番地に在って周知の遺跡として知られていた所である。今回の発見によって車木遺跡は家地川を跨ぎ東方へと延び広範囲に形成されていることが明らかとなり、当遺跡の



第1図 発見当時の車木遺跡（中央平坦地）

範囲設定ラインを大きく書き改めなければならなくなつた。ちなみに従来の遺跡の土地所有者は田辺善久氏他であり、今回の場所の大部分は田辺雅彦氏所有地である。

(II) 調査の組織

調査主体	西土佐村教育委員会	教育長	清水忠孝
		教育次長	柳木久夫
		社会教育係長	朝比奈雅人
		社会教育係主幹	浦宗康
		国体室係長	芝正司
調査担当者	日本考古学協会会員	木村剛朗	
調査員	西土佐村文化財保護審議会会长	今城宗久	
作業員	西田定男、田辺静香、田辺利明、松浦千加子 松浦秋利、田辺善久、横山定利		

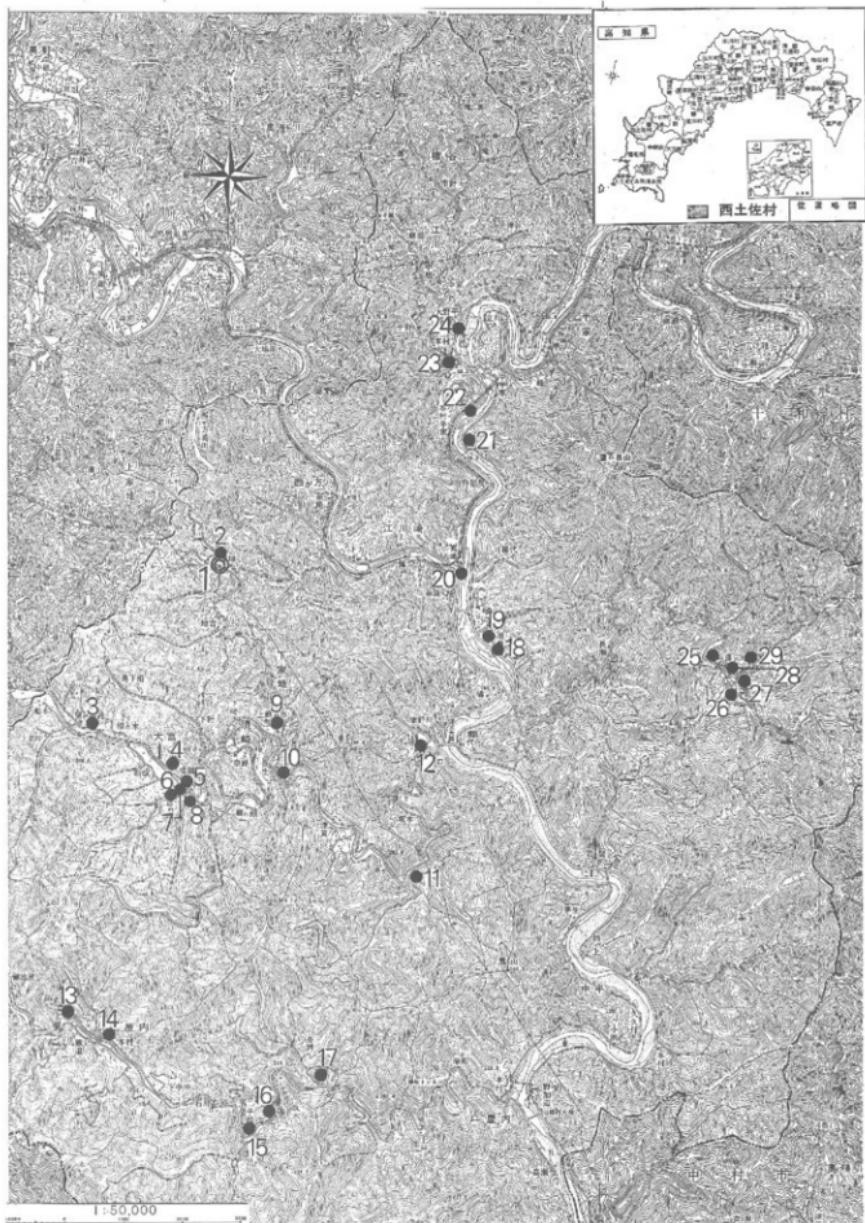
第2章 遺跡の位置と周辺の遺跡

高知県西南部の内陸山地、高知県幡多郡西土佐村下家地字クルマキ小字新田に本遺跡は所在する（第2図）。クルマキ地区を貫流する小河川の家地川は、愛媛県北宇和郡松野町の目黒隧道の在る地蔵峠（標高452m）の北斜面に源を発し、小さな谷を集めて蛇行を繰り返し西土佐村長崎地区で目黒川に合流し、さらに目黒川は東南流し津野川地区で四万十川本流に合流している。

本遺跡は、この家地川が大きく弧を描き蛇行するその左岸に形成される河岸段丘上、標高143m前後に立地している。河岸段丘は北から南方の家地川に向って緩やかに傾斜し、全面、水田となっている。この段丘は扇状に広がり、その先端は家地川に接する。さらに本河川の背後から段丘北側にかけては標高200m～300m級の低山性の山が段丘北側を円状に取り囲み、一見、小盆地状地形を呈する。この場所は日当たりが良く、その上日照時間が長く、しかも周囲を山で囲まれていることによって風当たりが弱く、生活するには絶好の環境にある。現在も、日当たり抜群の南面する山麓に人家が並列し見られる。

以上のように、本遺跡は南面する広大な河岸段丘上に立地し、周辺の自然環境に恵まれた所に見られるのであるが、本地域にはこのような生活環境の勝れた個所が諸々にみられ遺跡は多数知られている。ただ、それらのほとんどが縄文期に属する。まず近年発見され注目された大宮・宮崎遺跡（1・2地点）が本遺跡の南方約4kmに所在する。（1地点）は片柏式・伊吹町式土器を多出し、四国で2例目となる配石遺構をも伴う後期中葉の祭祀遺跡で、遺構内より全国初の女人像を線彫した線刻碟も出土し一躍脚光を浴びた所である。（2地点）からは内陸山地では出土例に恵まれなかった後期前葉の宿毛式、三里式の良好な土器が多数出土し、この時期における生活の存在が明らかとなり、縄文草創期や前期に属する遺物の出土も知られている。さらに北東に直線距離約6kmの所には纖維混入土器と草創期に属する見事な石棺を出土した江川中畠遺跡がみられ、その近くの四万十川本流右岸に形成する河岸段丘上には江川大野平遺跡が所在する。前者の遺跡は発見直後に発掘調査がなされ、平成12年にその調査報告書が刊行された。後者は早期から前期、後期、晩期の土器、石器を出土し、遺跡も大規模で遺物も豊富である。特に早期の尖頭器や前期の轟B式土器と羽鳥下層式土器、晩期の突帯文土器は注目される。当遺跡から四万十川本流を少し下ると両岸に本村半家や長生遺跡が所在し、さらに下った個所の広見川が合流する川崎地区に架かる新川崎橋下の右岸に形成する河岸段丘上には宮地遺跡がみられる。この宮地遺跡は近年、今城宗久氏によって発見された所で、ここからは草創期に属するサヌカイト製の大型有舌尖頭器や、後期の土器片、石鏃、石錘などが表採されている。当遺跡のすぐ下流、左岸には弘岡や平口遺跡が所在する。

四万十川の本流域には上述のように両岸に遺跡をみるもの、目黒川や黒尊川、藤ノ川川の各流域にも本流域に劣らぬ数の遺跡が存在する。まず藤ノ川川流域は、上流地帯に位置する藤ノ川地区に遺跡は集中してみられる。この地区には堂ヶ市、尾崎、棟屋敷、白髪山、胡麻谷と



第2図 車木遺跡の位置と西土佐村の縄文遺跡分布図

(平成13年現在)

第1表 西土佐村の遺跡名一覧表

遺跡No.	遺跡名	時期	参考文献・備考
1	車木	縄文早・前期	狩獵・漁撈を主体とする内陸山地の集落遺跡
2	西クイ原	縄文後期	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年。
3	留が奈路	旧石器後期・縄文後期	今城宗久氏の表採資料による。
4	上深田	縄文早・前期	溝潤幸三氏によって発見された所で、尖頭状石器5点、石鎌18点が表採されている。資料は溝潤氏が所蔵され、筆者実見。
5	深田	縄文後期	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年。
6	大宮	縄文前期	木村剛朗「大宮遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
7	大宮・宮崎 第1地点	縄文早・前・中・後・晚期	木村剛朗「大宮・宮崎遺跡Ⅰ」高知県西土佐村埋藏文化財調査報告書第3集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成11年。
8	大宮・宮崎 第2地点	縄文草創・前・後期	木村剛朗「大宮・宮崎遺跡Ⅰ(続編)」高知県西土佐村埋藏文化財調査報告書第4集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成12年。
9	上籠が市	縄文後期	木村剛朗「上籠ヶ市遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
10	長崎	縄文早期	今城宗久氏によって発見され、資料は筆者実見。
11	下津賀	縄文前期	木村剛朗「下津賀遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
12	沖	縄文早・前期	木村剛朗「沖遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
13	城の下	縄文後期	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年。
14	奥屋内本村	縄文後期	今城宗久氏の表採資料による。
15	曾我の西	縄文後期	木村剛朗「曾我の西遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
16	下久保	縄文後期	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年。
17	広井駄場	旧石器後期・縄文草創・早・前・中・後期	木村剛朗「広井駄場遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年、山口将仁「高知県における後期旧石器時代の様相」『旧石器考古学』41、旧石器文化談話会、平成2年。
18	平口	縄文後期	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年。
19	弘岡	縄文後期	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年。
20	宮地	縄文草創・後期	今城宗久氏によって発見された遺跡で、資料は筆者実見。
21	長生	縄文後期	高知県教育委員会『高知県遺跡地図・幡多ブロック』昭和63年。

遺跡No	遺跡名	時 期	参考文献・備考
22	本村半家	縄文後期	高知県教育委員会「高知県遺跡地図・幡多ブロック」昭和63年。
23	江川中畠	縄文早・早・前・後期、弥生後期	犬飼徹夫他『江川中畠遺跡』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第5集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成12年。
24	大野平	縄文後期	今城宗久氏発見、表探資料による。
25	堂ヶ市	縄文草創・早・中期	岡本健児『高知県史考古編』高知県、昭和43年。木村剛朗「堂ヶ市遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年。
26	胡麻谷	縄文後期	今城宗久氏発見、表探資料による。
27	白髮山	縄文後期	今城宗久氏発見、表探資料による。
28	尾崎	縄文後期	今城宗久氏発見、表探資料による。
29	棟屋敷	縄文早・前期	木村剛朗「棟屋敷遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年。

5個所が確認され、中でも堂ヶ市遺跡出土の局部磨製石斧2点は完形で、その特徴から草創期に編入されているものである。また本地区の河内神社には御神宝として祭られている大型で見事な完形の両頭石斧1点が知られている。ただ、本石斧については出土地が定かでないのが残念である。

目黒川流域には、車木遺跡を含め7個所をみる。目黒川は中流域で家地川が合流しているが、その合流点周辺に上篠ヶ市、長崎遺跡が所在し、家地川の上流域にみる車木遺跡のすぐ上流側に西クイ原遺跡がみられる。目黒川の上流域には旧石器時代後期の翼状剥片石核を出土した留が奈路が、その下流に上深田や深田遺跡、そして大宮遺跡、さらに下流に下津賀遺跡、本流へと合流する近くに沖遺跡を見る。中でも大宮遺跡は既述の大宮・官崎遺跡（1・2地点）に近接した低丘陵の先端に立地し完形の環状石斧を出土している。

黒尊川流域には上流から城ノ下、奥屋内本村、曾我の西、下久保、広井駄場と5個所が所在している。中でも広井駄場と曾我の西両遺跡は良好な遺物の出土がみられ、前者からは後期旧石器末葉の細石核や早期の尖頭状石器、石鎌、後期の石錘、スクレイバーなどと多数の石器剥片を出土している。後者からは、後期の宿毛式や平城I式土器片、打製石斧、石鎌、石錘、叩石など豊富な遺物の出土を見る。

以上のように西土佐村内には29個所の遺跡が明らかとなっているが、その内、江川中畠遺跡より弥生土器の出土が知られている他は総てに近くが縄文期に属し、古墳、古代にかけての遺跡は皆無で、その実態は明らかでない。ただ戦国期（中世）の山城については糖ノ森城、江川城、高手之城、用井城、辰巳城、勝城、大宮城、北川城、関善城、一覚城、津島陣跡、小串城など12個所が明らかである⁽¹⁾。これによると城跡は、四万十川本流と目黒川、黒尊川、家地川、江川川の各支流域に分布している。なお、これら12個所を数える城跡の内、発掘調査され

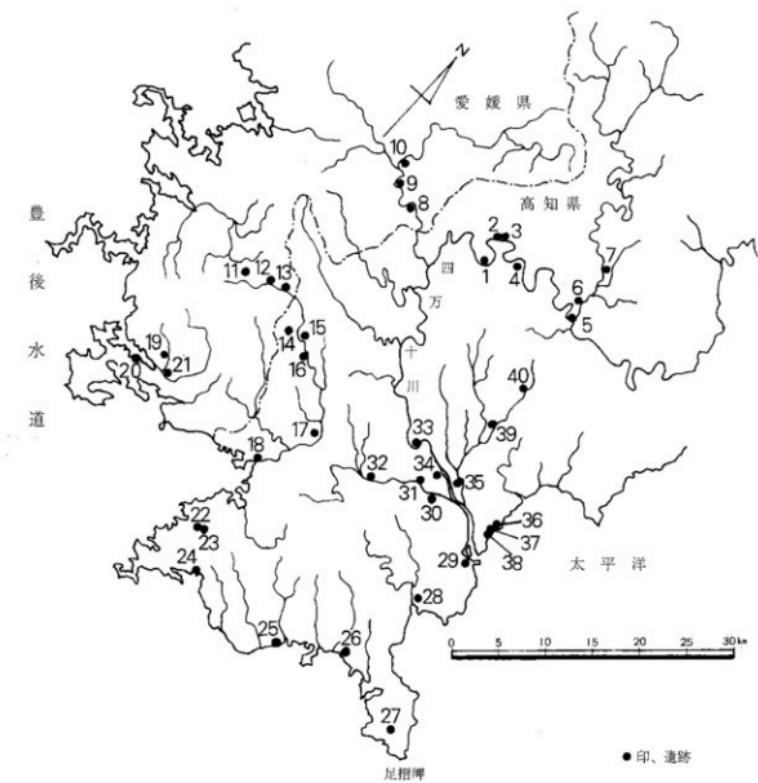
た所はない。

次に西土佐村周辺の遺跡を概観すると、東に隣接する十和村には早くから知られている後期の広瀬遺跡⁽²⁾や草創期～後期までの十川駄場崎遺跡⁽³⁾が所在する。前者の遺跡は、網漁撈を示す石錘を多く出土することで著名で、後者は県下で最初に蒸し焼き遺構としての集石炉が発見された所であり、さらに草創期の槍先形尖頭器や豆粒紋土器、早期の見事な石鎌を多数出土している。また駄場崎遺跡に隣接する川口地区には中津式土器に伴い多数の石錘が出土し、後期初頭に網漁撈が開始されていたことを示す川口ホリキ遺跡⁽⁴⁾が所在する。さらに四万十川を週上した所には後期に属する無頭式の磨製石剣を出土した奈路遺跡⁽⁵⁾を見る。十和村の東方に接する大正町には草創期の小型有舌尖頭器を出土した森駄場遺跡⁽⁶⁾、そして草創期～早期に編入される断面形がカマボコ状を呈する特殊なタイプの大型磨製石斧や細石鎌を多出する木屋ヶ内遺跡⁽⁷⁾や、すぐ下流に早期の押型文土器、後期の中津式、宿毛式、片粕式土器などを出土した江師遺跡⁽⁸⁾がみられる。

西土佐村北方の四万十川本流へと注ぐ広見川流域には良好な遺跡が散在する。下流から、全国で第2番目に大きな草創期に属する神子柴系の局部磨製石斧を出土した真土遺跡⁽⁹⁾がみられ、近接した所に同期に属する木葉形を呈す尖頭器を出土した延野々遺跡⁽¹⁰⁾が所在し、さらに上流域には四国で最初に発見された後期の大規模な配石遺構を伴う岩谷祭祀遺跡⁽¹¹⁾を見る。

西方の松田川上流域には近年発見され脚光を浴びた後期の犬除遺跡⁽¹²⁾を見る。本遺跡からは後期の宿毛式と片粕式土器が多量に出土し、石材核や石鎌、スクレイパー、磨製石斧、打製石斧、石錘など豊富な遺物出土量を誇る。すぐ上流域に前期の轟B式土器や姫島産黒曜石製石鎌を多出する中駄場⁽¹³⁾や池ノ岡遺跡⁽¹⁴⁾が並列しみられる。本地域の豊後水道に面する御莊湾岸には遺跡が密集し、中でも後期の平城貝塚⁽¹⁵⁾は四国最大規模を誇り平城式土器の標式遺跡として全国的に著名である。また、早期～後期にかけての時期に属する姫島産黒曜石製石鎌を大量に出土し、後期旧石器時代のナイフ形石器をも出土する深泥遺跡⁽¹⁶⁾も近接してみられ、平城貝塚背後の丘陵上には四国西南部で最大規模を有する旧石器時代後期の和口遺跡⁽¹⁷⁾が所在する。この遺跡からは国府型ナイフ形石器や翼状剥片石核、翼状剥片などを多量に出土し、後期旧石器時代を研究する上で避けて通ることのできない重要な遺跡となっている。本地域からさらに南下した高知県宿毛市にも、全国的に知れわたった国史跡指定の宿毛貝塚⁽¹⁸⁾を見る。本貝塚は後期前葉の宿毛式土器の標式遺跡で、平城貝塚と共に人骨の出土が知られている。宿毛湾へと注ぐ松田川流域にも遺跡は多く下流地帯から前期の轟B式土器や晚期の打製石斧を多量に出土する橋上遺跡⁽¹⁹⁾、中流地帯に礫器状石器を出土する笠平遺跡⁽²⁰⁾、さらに後期旧石器～縄文草創期の遺物を出土する池ノ上⁽²¹⁾や楠山遺跡⁽²²⁾を見る。

宿毛市から南下した大月町には後期旧石器時代～縄文早期にかけての石器原石採掘遺跡のナシケ森第1地点遺跡⁽²³⁾や、ナイフ形石器、角錐状石器、細石核を出土するナシケ森第2地点遺跡⁽²⁴⁾がみられる。太平洋に面する海岸部には良好な平城I式や同II式土器を出土する後期の尻貝遺跡⁽²⁵⁾が所在し、さらに海岸部を東進した土佐清水市片粕には後期後半の片粕式土器の標式遺跡の片粕遺跡⁽²⁶⁾がみられ、その東部に後期初頭の中津式土器の完形（片口土器）を



第3図 四国西南部の主要後期旧石器、縄文遺跡分布図

(遺跡名)

1. 広瀬	2. 川口ホリキ	3. 十川駄場崎	4. 奈路	5. 森駄場	6. 江師
7. 木屋ヶ内	8. 真土	9. 延野々	10. 岩谷	11. 池ノ岡	12. 中駄場
13. 犬除	14. 笹平	15. 楠山	16. 池ノ上	17. 橋上	18. 宿毛貝塚
19. 和口	20. 深泥	21. 平城貝塚	22. ナシケ森 第1地点	23. ナシケ森 第2地点	24. 尻貝
25. 片柏	26. 下益野	27. 唐人駄場	28. 下ノ加江	29. 初崎	30. 船戸
31. 国見	32. 有岡ツグロ 橋下	33. 三里	34. 入田	35. 中村貝塚	36. 双本駄場 海
37. 双中駄 海場	38. 平野茶園	39. 奈路駄場	40. 大用		

出土した下益野遺跡⁽³⁷⁾をみる。太平洋へと突出した足摺半島にも姫島産黒曜石製石器を多出することで著名な唐人駄場遺跡⁽³⁸⁾が所在する。本半島を東に迂回した下ノ加江には晩期の下ノ加江遺跡⁽³⁹⁾が下ノ加江川の河口部にみられる。

西土佐村の南部に広がる中村市にも遺跡は多数知られている。特に四万十川流域に所在する遺跡として有名なのは石錐を多量に出土し、三里式土器の標式遺跡となっている後期前葉の三里遺跡⁽⁴⁰⁾が所在し、その下流域に晩期終末の突帯文土器と打製石斧を多数出土する入田遺跡⁽⁴¹⁾がみられ、河口には後期を主体とする初崎遺跡⁽⁴²⁾がみられる。四万十川支流の中筋川や後川流域にも遺跡は多く、中筋川には片縫式、伊吹町式土器を多出した船戸遺跡⁽⁴³⁾や、早期～後期までの遺物を出土する国見遺跡⁽⁴⁴⁾、さらに晩期の突帯文土器を多出する有岡ツグロ橋下遺跡⁽⁴⁵⁾をみる。後川には精巧に出来た細石錐をみる草創期～後期の奈路駄場遺跡⁽⁴⁶⁾や、石錐、石錐を多く出土する早期～後期の大用遺跡⁽⁴⁷⁾が所在する。次いで中村市街地には西日本有数の晩期の中村貝塚⁽⁴⁸⁾が所在し、太平洋に面した海岸部には国府型ナイフ形石器や翼状剥片石核、翼状剥片を出土する後期旧石器時代の双海中駄場遺跡⁽⁴⁹⁾や平野茶園遺跡⁽⁵⁰⁾がみられ、精巧な作りの石錐を多出する双海本駄場遺跡⁽⁵¹⁾が両遺跡に近接し所在する（第3図）。以上、西土佐村周辺に所在する遺跡を概観してきたのであるが、本地域は既述のとおり丁度、後期旧石器時代から縄文期の遺跡を主体とする遺跡群に囲まれた言わば、ほぼその中心部に位置しているのである。

註

- (1) 高知県教育委員会『高知県遺跡地図－幡多ブロッカー』昭和63年。
- (2) 岡本健児・広田典夫『高知県広瀬遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、昭和48年。木村剛朗『広瀬遺跡－四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
- (3) 山本哲也・岡本桂典『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』十和村教育委員会、平成元年。
- (4) 山本哲也『十川駄場崎遺跡発掘調査報告書』十和村埋蔵文化財調査報告書第2集、十和村教育委員会、昭和63年。
- (5) 松田直則『奈路遺跡－十和村埋蔵文化財発掘調査報告書第4集』、高知県十和村教育委員会、平成5年。
- (6) 木村剛朗『森駄場遺跡－四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
- (7) 前田光雄『木屋ケ内遺跡』大正町教育委員会、平成7年。
- (8) 木村剛朗『江師遺跡』『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
木村剛朗『幡多のあけぼの』幡多埋文研、平成3年。
- (9) 木村剛朗『真土遺跡』『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
- (10) 菊沢尋吉『広見川流域の石器と土器－松野町を中心として－』『郷土教育資料1・研究紀要』北宇和郡松野町郷土研究会、昭和62年。木村剛朗『延野々遺跡』『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
- (11) 西田栄・大飼徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』広見町教育委員会、昭和54年。
- (12) 多田仁『犬除遺跡』津島町教育委員会、平成12年。
- (13) 多田仁『中駄場遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター、平成11年。
- (14) 木村剛朗『池ノ岡遺跡』『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研、平成7年。橘昌信『池ノ岡遺跡試掘調査報告書』津島町教育委員会、平成3年。
- (15) 木村剛朗他『平城貝塚』第4次発掘調査報告書、御菴町教育委員会、昭和57年。木村剛朗『平城貝塚』『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研、平成7年。
- (16) 木村剛朗『深泥遺跡』『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研、平成7年。

- (17) 木村剛朗「和口遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (18) 岡本健児「高知県史考古編」高知県、昭和43年。山本哲也・広田佳久・下村公彦「高知県宿毛貝塚発掘調査報告書」高知県教育委員会、昭和61年。
- (19) 木村剛朗「橋上遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (20) 木村剛朗「佐平遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (21) 木村剛朗「池ノ上遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (22) 松田知彦・森田尚宏「池ノ上・楠山遺跡」「高知県埋蔵文化財センター年報3」平成6年。
- (23) 木村剛朗「ナシケ森第1地点遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (24) 木村剛朗「ナシケ森第2地点遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (25) 前田光雄「尻貝遺跡」大月町教育委員会、平成3年。木村剛朗「尻貝遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (26) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗「高知県片柏遺跡」高知県教育委員会、昭和54年、木村剛朗「片柏遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (27) 木村剛朗「下益野A地区遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (28) 木村剛朗「九州姫島産黒曜石製石器を多量出土する高知県松尾遺跡」「月刊考古学ジャーナル」38、ニュー サイエンス社、昭和44年。
- (29) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗「高知県下ノ加江遺跡」高知県文化財調査報告書第17集、高知県教育委員会、昭和46年。
- (30) 岡本健児・広田典夫・木村剛朗「三里遺跡」中村市教育委員会、昭和53年。
- (31) 岡本健児「高知県入田遺跡」「日本農耕文化の生成」本文編、昭和36年。
- (32) 木村剛朗「初崎遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年。
- (33) 出原恵三・松田直則他「船戸遺跡」中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ、高知県埋蔵文化財センター 発掘調査報告書第27集、高知県教育委員会、平成8年。
- (34) 木村剛朗「国見遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年。曾我貴行「国見遺跡」中村市教育委員会、平成6年。
- (35) 木村剛朗「有岡ツクロ橋下遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年。
- (36) 木村剛朗「奈路駄場遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年。
- (37) 木村剛朗「大用遺跡」「四万十川流域の縄文文化研究」幡多埋文研、昭和62年。
- (38) 岡本健児「高知県史考古編」高知県、昭和43年。木村剛朗「中村貝塚」「四万十川流域の縄文文化研究」幡 多埋文研、昭和62年。
- (39) 木村剛朗「双海中駄場遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (40) 木村剛朗「平野茶園遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。
- (41) 木村剛朗「双海本駄場遺跡」「四国西南沿海部の先史文化」幡多埋文研、平成7年。

第3章 遺跡及び調査の経過

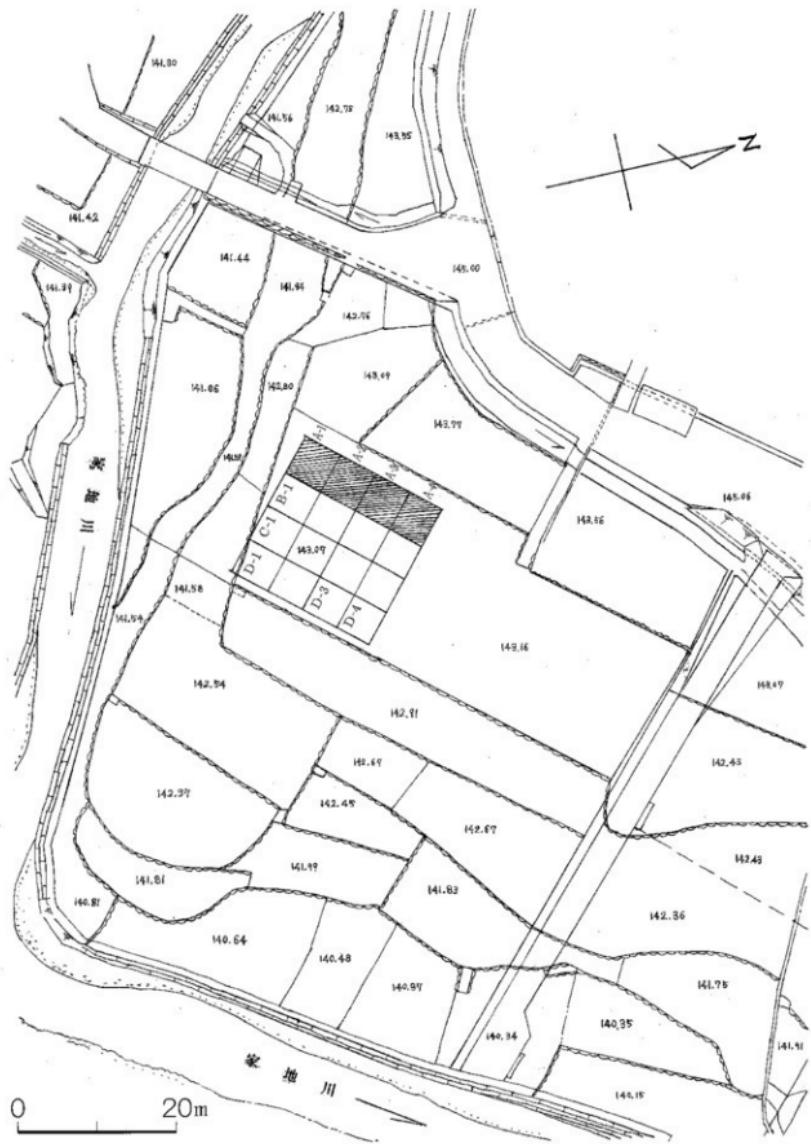
高知県幡多郡西土佐村字車木小字新田に所在する車木遺跡は、前面に大きく蛇行し流れる小河川の家地川に接して南面し扇状に広がる河岸段丘上に立地する。遺跡は全面水田で、南北約80m、東西約100mにわたって中世・近世の陶磁器片や縄文期の石器剥片などの遺物が散見される。これらの遺物をみる本遺跡は西端部が最も高く標高約145mを測り、南方から東方にかけての家地川に接する地点で標高約140m前後と低く、この地は西方から南東方向にかけて緩傾斜している。なお、段丘中央部は142m前後である。

ほ場整備によって発見された本遺跡は、現地視察の際には既に表土（田泥土）は削除されていて、その直下に堆積する黄褐色をなすアカホヤ火山灰土層が全面にわたりむき出しとなった状態であった。所によつてはアカホヤ火山灰土層が深く削平された個所や、さらに深く掘り下げられて疊層にまで達している個所もみられ、特に段丘先端部は深く掘削されていて広範に疊層を露出している。このような状況の中、発見者の今城宗久氏立ち会いの下、氏が遺物を最も多く表探したとする個所を最有力視し、その地点に幅5m、長さ20mの発掘調査区を設定した。さらに、本地点に接し南東方向にアカホヤ火山灰土層を露出する個所についても表探の結果、遺物の出土が確かめられたためこの地区についても調査の必要性を痛感し、先の設定区から15m拡張して20m×20mの範囲の調査区を設定した（第4図）。調査には記録、遺構の検出を考慮し調査区を5m方眼のグリッド方式で進めることとし、西南端からA・B・C・Dとし、東北方に向いA地区からA-1区～A-4区と定め、B～D区も同様の方式で記録することとした。ところが、ほ場整備を早めなくてはならないとのことで、調査区をA地区（5m×20m）のみに縮小せざるを得なくなり、B～D区は手を付けねまま残すことになった。というのも、ほ場整備はこの地区を掘削することなく盛り土で被い嵩上げ工法で仕上げるとの方法が採られることとなり、発掘調査は不要となった。

発掘調査地点のA地区は、既述のとおり幅5m、長さ20mの100m²である。この地区は本遺跡の西端近くにあたり、当遺跡を形成する河岸段丘の最も高い所に位置している。調査区は前述したとおりほ場整備によって表土（田泥土）が削除されていて、表面には石器剥片などの露出をみるなどの状況から、発掘調査には重機を全く使用せず終始、手作業にて行った。調査は平成12年5月8日から同年6月7日までをあて実施した。着手にあたり、調査区を家地川の上流側にあたる西北端よりA-1区とし、下流側に向ってA-2区、A-3区、A-4区とし順次作業を進めた。以下、その調査経過を発掘日誌より要約し記す。

5月8日（月）快晴

本遺跡発見者今城宗久氏が遺物を最も多く表探したとする個所を今城氏同行の下、再踏査し、その個所に幅5m、長さ20mの調査区を設け、さらに南東に接する個所へと調査区を拡張し20m×20mの調査区を設け、5m方眼のグリッド設定。



第4図 車木遺跡地形図と発掘調査区（中央斜線部分が発掘区）

5月9日（火）快晴

A-1区より発掘調査着手し、露出しているアカホヤ火山灰土層をまず深さ10cm掘り下げる。条痕文を有する縄文前期初頭の轟B式深鉢胴部片、姫島産黒曜石製石鎌、スクレイパーなどの遺物と、石器剥片の出土をみた。午後、A-2区の掘り下げ開始す。当日、西土佐村教育委員会教育長清水忠孝、同村議会事務局長河野昌弘両氏と高知県教育委員会文化財保護室松田知彦氏来観（第5図）。

5月10日（水）晴後雲

A-2区の掘り下げ続行し午後完了。A-1区、A-2区の遺物平面分布図、レベル、写真記録行う。A-3区の掘り下げ開始。打製石斧頭部残片と若干の石器剥片出土。当日、体験学習で西土佐中学生と、同時に松田恵美（地域教育指導主事）、藤本千穂（役場企画振興課）両氏発掘に参加（第6図）。

5月11日（木）雲時々雨

A-3区掘り下げ続行し午前中完了。スクレイパー、石材核、叩石、姫島産黒曜石剥片などの出土をみた。これら遺物の平面分布図、レベル、写真記録完了。A-4区掘り下げ着手。本区で大型の石皿出土し、その近くで集石遺構検出（第7図）。

5月12日（金）快晴

A-4区掘り下げ完了。遺物平面分布図、レベル、写真記録、集石遺構の測図終える。A-1区アカホヤ火山灰土層2回目の掘り下げ開始。姫島産黒曜石、サヌカイト剥片、スクレイパー、石材核など良好な搔器1点の出土をみる（第8図）。午後、西土佐村教育委員会のマイケル・ペイステイレグス氏、下家地小学校生徒、教員の見学あり、今城氏説明に当たる。

5月15日（月）雲時々雨

A-1区の掘り下げ完了。A-2区の2回目掘り下げ着手。土器片、石器剥片少量出土。人頭大の円碟も数個出土す（第9図）。

5月16日（火）雲後雨

A-1区のアカホヤ火山灰土層より出土の石錐、スクレイパー、石材核、姫島産黒曜石剥片、土器片など遺物平面分布図、レベル、写真記録と碟群の平面測図作成。午後、A-1区アカホヤ火山灰土層下部への掘り下げ開始。当日、下家地小学校生徒、同校教員の見学あり今城氏説明行う（第10図）。

5月17日（水）雨後雲時々晴

A-1区アカホヤ火山灰層下部の掘り下げ続行。遺物は頁岩製の横長剥片1点と姫島産黒曜



第5図 A-1区の発掘調査着手光景



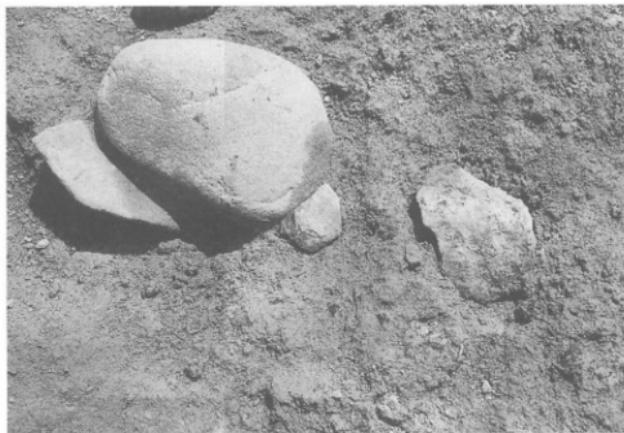
第6図 地元の中学生、担任教諭参加の発掘調査体験学習光景



第7図 A-4区の発掘調査光景。手前は大型石皿の出土状況



第8図 A-1区の第2層アカホヤ火山灰土層に出土の遺物



第9図 人頭大円礫と石器剥片出土状況



第10図 地元の小学生による見学と今城宗久調査員の説明光景

石剥片を見たのみで極端に少なく、発掘に平行し遺物の洗浄も行う。

5月18日（木）快晴

A-1区の掘り下げ続行。少数の石器剥片と姫島産黒曜石製石鎌1点の出土をみた。A-2区の遺物出土平面分布図、レベル、写真記録行う。A-2区アカホヤ火山灰土層中より出土の石鎌は良好で注目される。体験学習で西土佐村本村小学校武内敏子校長以下生徒6名の参加あり、今城氏説明、指導行う。

5月19日（金）雲後雨

A-1区の掘り下げで良好な叩石の出土を見る。本区の遺物平面分布図、レベル、写真記録、さらに疊群の測図終える。A-2区の3回目掘り下げに着手。人頭大から拳大円礫を用いた集石遺構検出。その他、若干の石器剥片をみる（第11図）。

5月23日（火）晴

A-2区の掘り下げ続行。石鎌、石鎌、石器剥片の出土あり。集石遺構の測図、遺物平面分布図、レベル、写真記録完了。A-1区の4回目掘り下げ続行。土器片の出土皆無。当日、愛媛考古学協会副会長犬飼徹夫、愛媛県埋蔵文化財調査センターの多田仁両氏来観。

5月24日（水）晴

A-1区の出土遺物平面分布図、レベル、写真記録を終え、本地区の掘り下げ続行。最深部へと進める。若干の石器剥片出土。

5月25日（木）晴

A-1区の掘り下げ続行。地表面より約1m下部で大粒の砂層に到達。本層からの遺物出土はない。本砂層の下部は拳大円礫、角礫層となり、この地区の掘り下げ完了す（第12図）。

5月26日（金）雲後雨

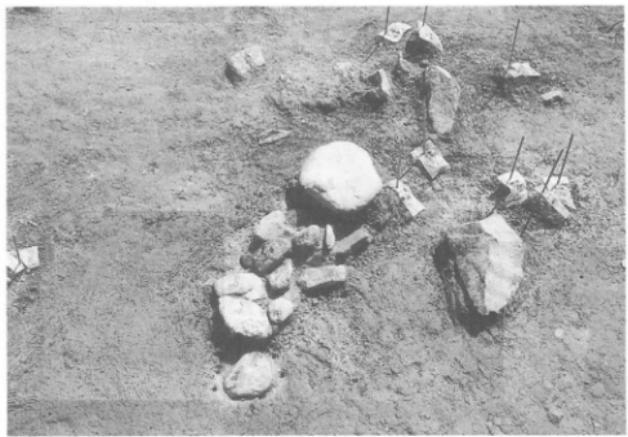
A-1区の砂層を再検証するが遺物の発見はない。一方、調査をA-3区に移し、アカホヤ火山灰層2回目の掘り下げ行う。少量の石器剥片と人頭大の円礫の出土をみる。

5月29日（月）晴

A-3区の掘り下げ続行。石器剥片の出土が目立ち、特に姫島産黒曜石剥片が多く注目された（第13図）。

5月30日（火）晴

A-4区アカホヤ火山灰土層下部への掘り下げ開始（第14図）。少数の石器剥片と石鎌2点



第11図 A-2区の集石遺構出土状況



第12図 A-1区の最下層確認掘り下げ状況



第13図 A-3区に出土の姫島産黒曜石剥片



第14図 A-4区アカホヤ火山灰土層下部への掘り下げ作業光景

の出土をみる。

5月31日（水）雨

出土遺物の洗浄と記録記入を終日行う。

6月1日（木）晴

A-3区完掘し、石鎚の他、多数の石器剥片出土。A-4区最終的掘り下げ行う。本区からも石鎚の出土があり、土器細片の出土もみられた。

6月2日（金）晴後雲

A-4区完掘し、A-3区、A-4区の遺物平面分布図、レベル、写真記録行う。A-4区に残る畦の地層断面測図、写真記録完了。A-2区、A-3区の地層断面測図、A-1区～A-3区の地層断面測図作成。A-4区畦の撤去作業に着手。

6月5日（月）晴後雲

A-4区を再度下部へと掘り下げる。土器細片、石器剥片の出土を見る。A-1区～A-3区までを最終的掘り下げを行う。午前中、清水忠孝教育長、榎木久夫教育次長出席の下、記者会見を行う（第15図）。午後、財高知県埋蔵文化財センターの出原恵三・坂本裕一・久家隆芳・吉成承三・泉幸代諸氏の来観あり、発掘調査の応援を得る。

6月6日（火）晴

A-1区～A-3区最終的掘り下げ完了。A-3区、A-4区に出土の遺物平面分布図、レベル、写真記録完了。午後、西土佐村議会事務局河野昌弘、西土佐村役場産業課岡村好文、稻田恭子、松浦加恵、清水久美、遠地忠彦諸氏の来観あり。

6月7日（水）晴

A-2区最下層出土遺物平面分布図、レベル、写真記録終え、A-1区～A-3区の掘り下げ部の地層断面図作成。A-2区に検出の集石遺構とA-4区に出土の石皿の取り上げ行う。午後、各地区の地層断面測図作成、写真記録行い発掘調査の総てを完了す（第16図）。



第15図 調査成果の報道記者会見光景



第16図 発掘調査完了光景

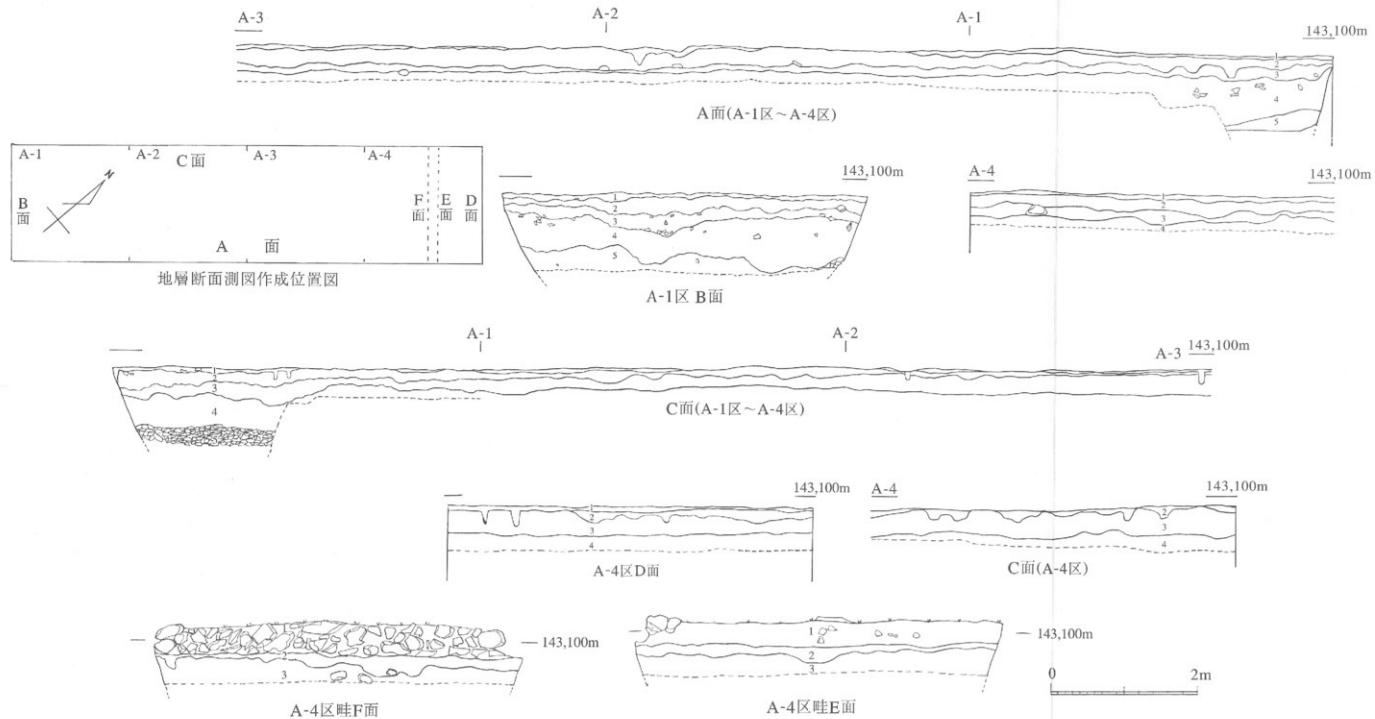
第4章 層序と遺物出土状況

発掘調査は、既述のとおり段丘西端部に設定した5m×20mの100m²と小範囲である。表土は、は場整備で削除されていて、調査に着手する時点で既に地表面にはアカホヤ火山灰土層が広範に露出した状態であった。それでも部分的には表土となる水田時の粘土層（田泥土）が確認された。全体的には水平ベースを保ち傾斜はほとんど認められない。

調査区における地層断面位置図（第17図）のA面、C面として標記したA-1区～A-4区には第1層水田粘土層が跡切れとぎれとなって薄く残されていることが分かる。C面A-1区とA-3区には近代の稻木杭跡が断面に鮮明に残されている。さらにA-4区D面にも先の稻木杭同様、第2層アカホヤ火山灰土層へと抜ける稻木杭跡が確認された。A面のA-1区、A-3区、A-4区とB面にも第1層水田粘土層が約10cm前後の厚さで残されているが、この面には稻木杭跡は確認されていない。遺物は第1層に中世の青磁、染付や、さらに近世にかけての陶磁器片を見るが、中世の遺物は極少で主体をなすのは近世の遺物である。これらは第1層に攪乱された状態で出土し、しかも、その大部分は地表面に露出散在した状態で確認された。

第1層水田粘土層の下部、第2層は、縄文時代前期を決定付ける、言わば鍵層となる鬼界カルデラの火山噴火によるアカホヤ火山灰土層（黄褐色）がほぼ水平に堆積する。その堆積はA面に良好で、A-1区からA-4区にかけて約20cm前後の安定した層厚をもって見る。特にA-2区、A-3区には堆積が厚く約30cmを測る。C面はA-1区に厚く、A-2区へと徐々に層厚を薄めてA-3区で極度に薄くなりA-4区では跡切れとぎれの状態となっている。C面のA-1区から続くB面は、第1層水田粘土層が10cm前後の厚さで残り、さらに第2層アカホヤ火山灰土層も約25cm前後の層厚をもち良好な堆積状況を示す。第2層には遺物の出土が最も多く、縄文時代前期に属する条痕文手法の豊かな土器片や多数の石器剥片と共に石鏸やスクレイバー、搔器、石錘、打製石斧、叩石、石皿、石材核などの出土が明らかである。石質の主体は、地元に産出する頁岩で、他に交易によって運び込まれた姫島産黒曜石（大分県国東半島東部の姫島）やサスカイト（香川県坂出市金山産）も出土している。特に、本層からの石錘は短軸両端に打ち欠きを加えた特徴的なタイプで、前期における網漁撈の存在を確定付けたこと合わせ注目された。これらの石錘は、家地川に寄ったA-1区、A-2区からの出土である。またA-1区には完形で良好な搔器1点が出土している。

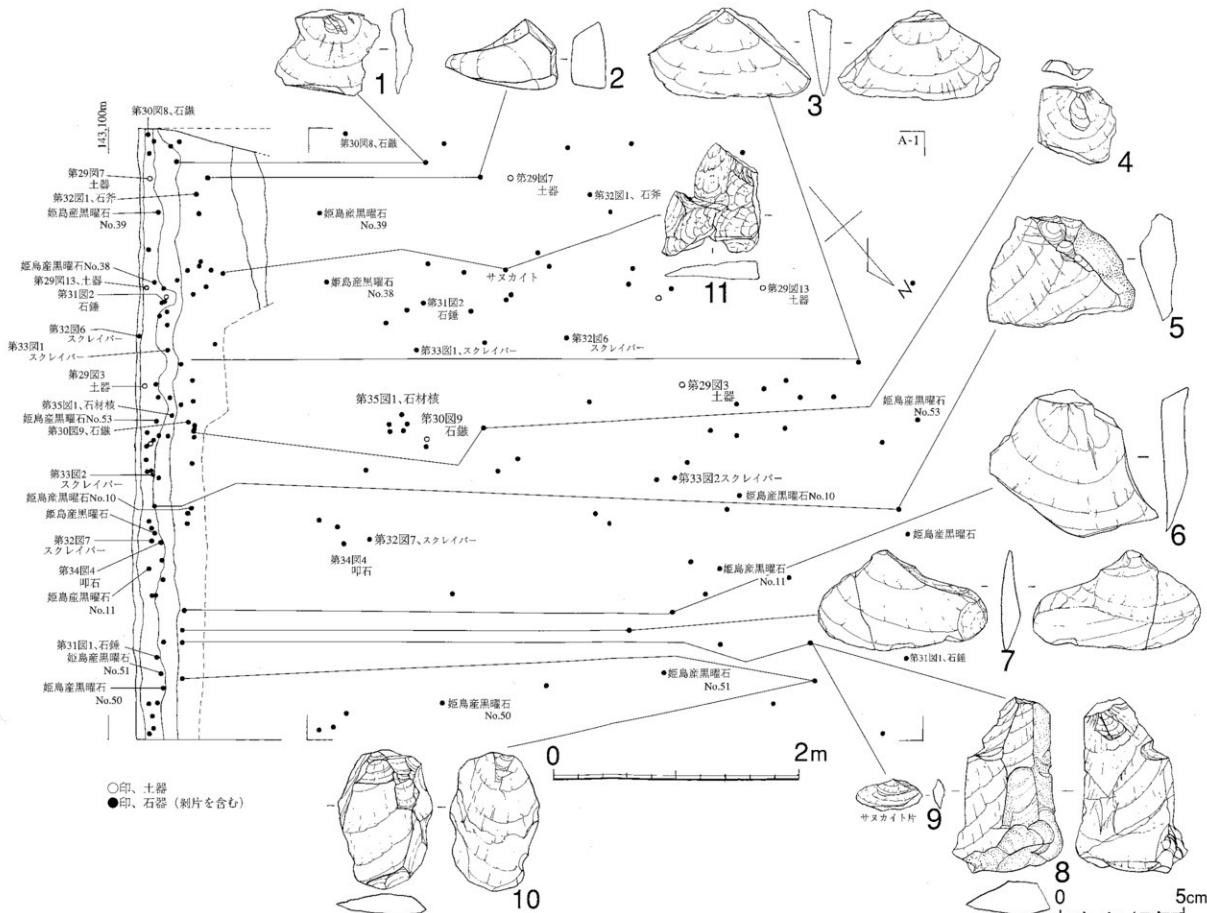
第2層の下部には、直径1～2mm前後の細礫を多く含む灰茶褐色粘土層が堆積する。本層は粘性が弱くザラザラし、しかも硬く締まった土質を呈する。層厚はA、B、C面共にA-1区が最も厚く約20cm～30cmを測り、A面ではA-2区からA-4区へと向かい徐々に厚さを減らし薄くなっている。ただしC面はA-1区～A-4区にかけて厚さ30cm前後と厚く安定した層厚を保つ。本層の下部、第4層はチョコレート色に近い茶褐色粘質土層となるが、厳密には本層の下部は橙褐色をなす。この上層は非常に硬く、移植ゴテでは刃が立たぬほどで、掘り下げが困難であった。層厚は50cm前後と厚く、部分的には70cmを測る個所もみられる。なお、この

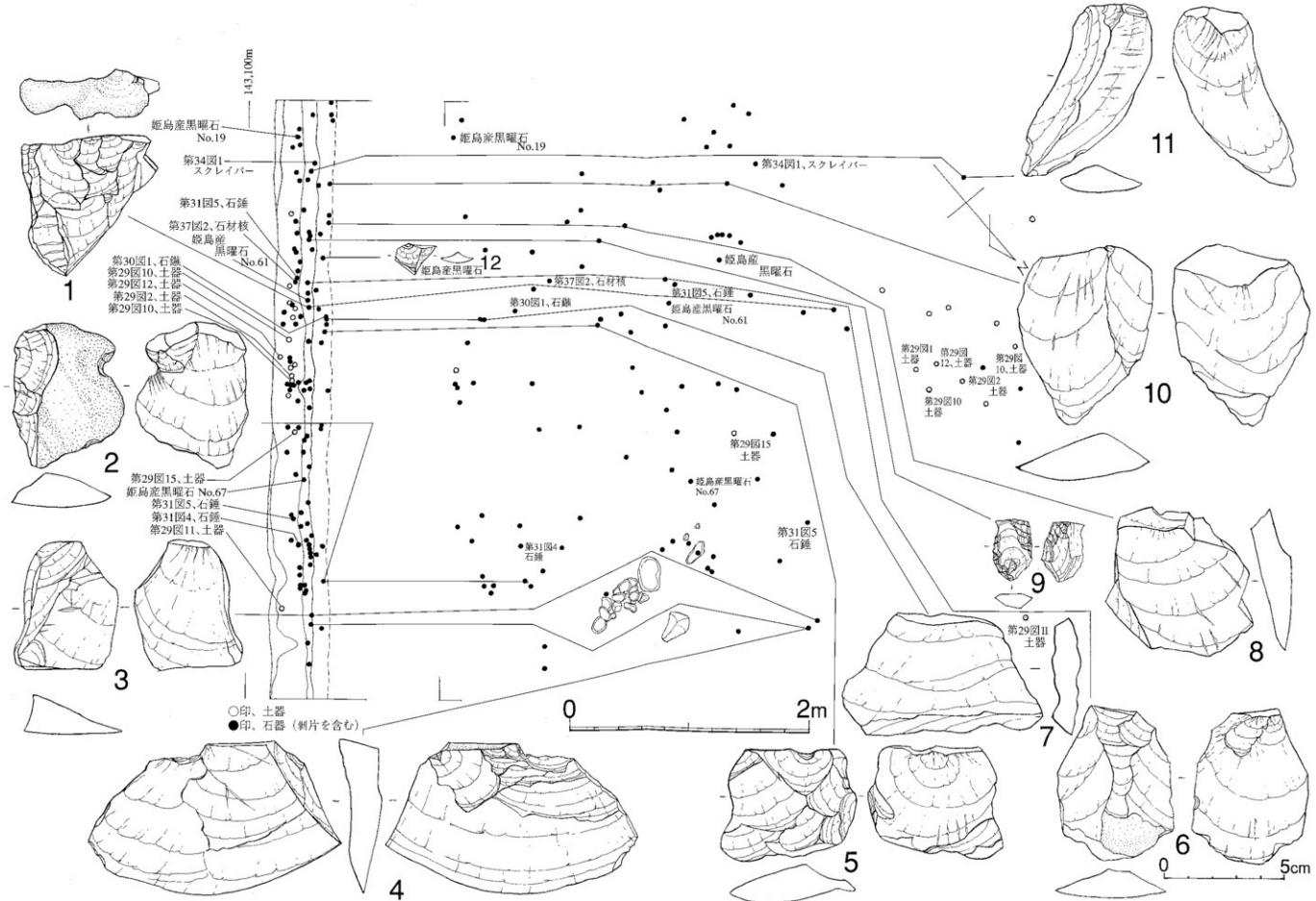


第1層、灰色粘土層（田泥土）
第2層、アカホヤ火山灰土層（黄褐色）
第3層、灰茶褐色粘土層（細縞多混入）

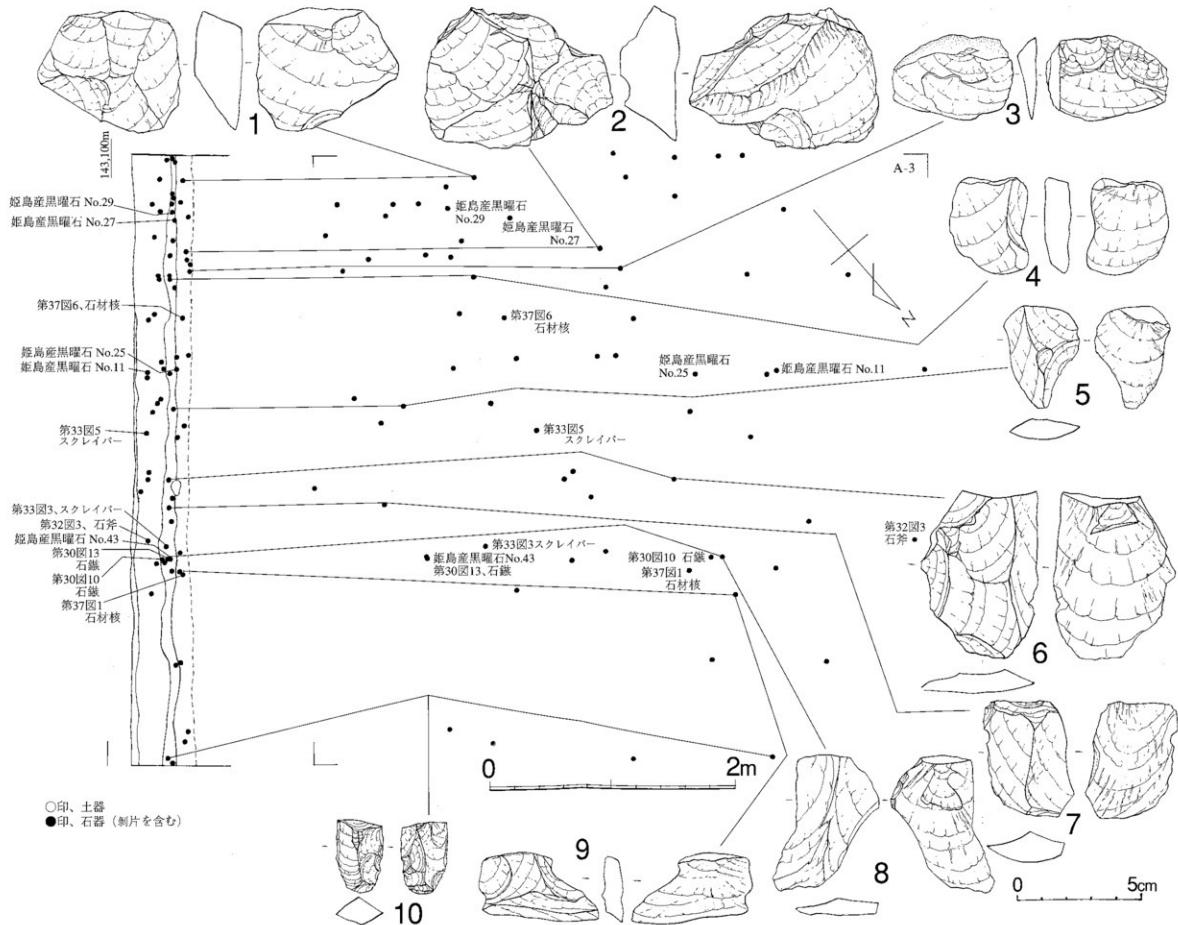
第4層、茶褐色粘土層（チョコレート色）
第5層、砂層（大粒砂、一部角礫混入）

第17図 車木遺跡調査区地層断面実測図

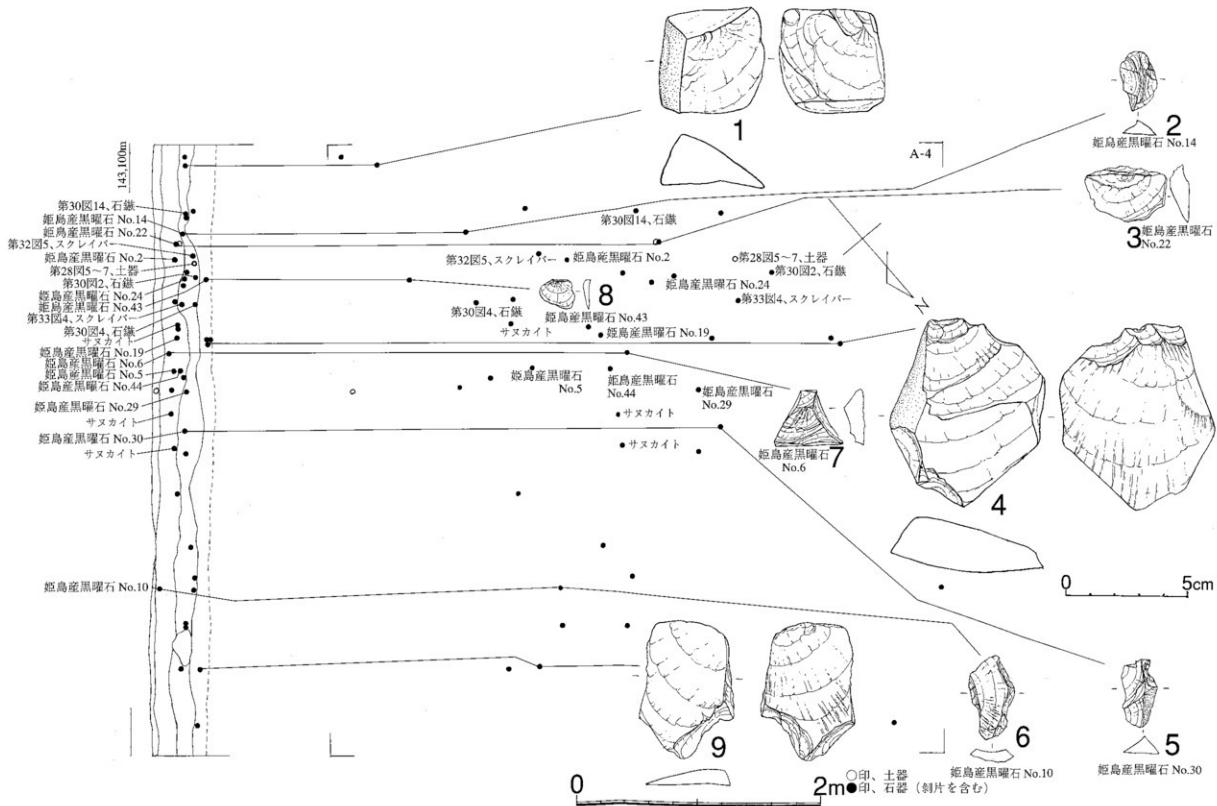




第19図 A-2区出土遺物垂直平面分布図



第20図 A-3区出土遺物垂直・平面分布図



第21図 A-4区出土遺物垂直・平面分布図

第4層から下部への層序についての確認は、日程の都合からA-1区のみで試みた。したがつて第4層以下の地層断面図についてはA-1区と標記した個所でのみ図示するにとどめている。第4層の下部、第5層は大粒の砂層となり層厚50cm前後を測り、以下、旧河川となる拳大、人頭大の円礫、角礫層となって終わっている。なお、A-4区には本来の畦を帯状にとどめる個所がみられたことから、この部分の地層断面図もA-4区畦F面、A-4区畦E面として図示した。この個所には第1層水田粘土層が約40cm残り、この粘土中に拳大から人頭大の角礫約50個が詰め込まれていた。その直下の第2層アカホヤ火山灰土層は、中央部で約30cmの層厚を示し、両側へと向い10cm～20cmと層厚を薄めている。以下、第3層の細礫混入の灰茶褐色粘質土層へと移行する。遺物は第3層や、さらに第4層からも出土した（第18～第21図）。石器剥片が主体で、若干のスクレイパーと石鎌、石材核がみられ、A-2区（第19図）とA-4区（第21図）では第3層に無文土器細片の出土も確認され、A-4区には土器片の他、良好なスクレイパー（第33図4）が出土している。またA-1区では第4層に小型寸詰まりとなったタイプの打製石斧1点が出土し、この打製石斧は本遺跡にみる遺物としては最も下層からの出土を示す資料となった。総体的に遺物はA-1区～A-3区に集中してみられる（第18図、第19図）。なお、本調査区においては、第2層から第3層にかけて直径20cm～30cm前後の大きさを持つ砂岩扁平礫が散在し出土したが、中でも、その出土はA-1区に最も多く見られた（第22図）。ただ、それらの出土分布には規格性がみられず、遺構と認められるものはない。



第22図 A-1区に出土の自然礫出土分布図

第5章 遺構と遺物

遺構はA-2区とA-4区で集石遺構を1基づつの2基を検出し、柱穴、住居跡等は確認できなかった。遺物は中世、近世の陶磁器片、縄文期の土器、石器がある。

I、遺構

遺構は既述のとおりA-2区とA-4区で検出された集石遺構2基で、共に本遺構は第2層アカホヤ火山灰土層中の下部、第3層直上に検出されたものである。

(a) A-2区検出の集石遺構（第23図）

本遺構は、一般的にみられるタイプとはやや異なり、礫を東西方向に長さ80cm、幅30cmと幅狭く帯状に築かれ細長く形成されている。礫は合計18個を数え、大きさにバラツキがある（第24図）。大きいものは人頭大ほどあり、また長さ6cmくらいの小礫までがみられるものの主体をなすのは拳大から手のひらくらいのもので占められ、平均重量600gを量る。それらの礫は1点の粘板岩を除けば総て砂岩で、その大部分は表面が滑らかに磨耗した河原石であり、扁平であることが特徴的である。礫は、大多数のものが火に焼け表面が赤褐色に変色し、黒褐色をなすタール状物が付着している。なお、これらの礫は火熱を受けているせいか、どれも脆い。

(b) A-4区検出の集石遺構（第25図）

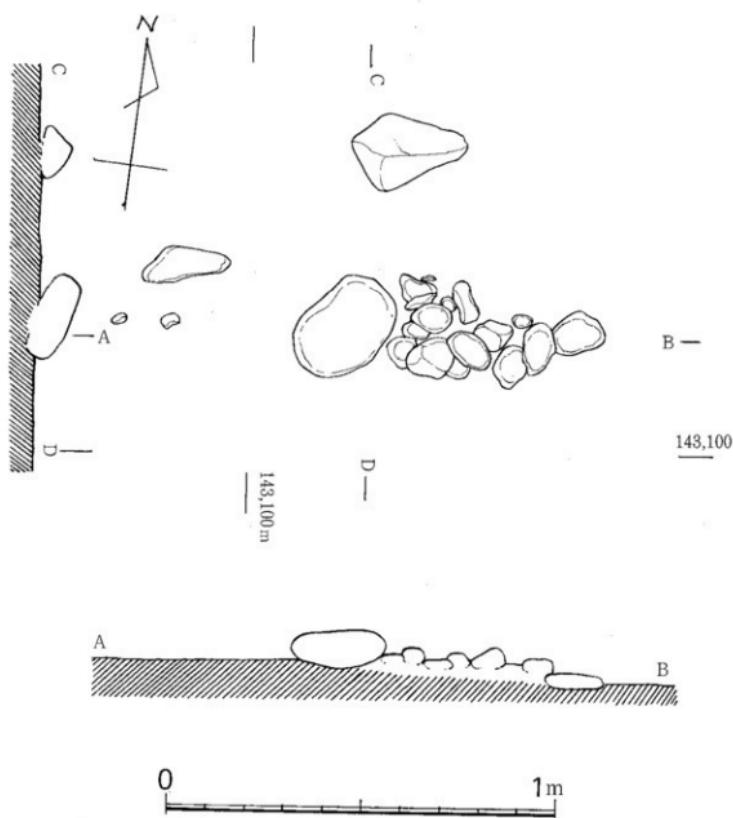
A-2区の集石遺構同様、本遺構もやや幅狭く長目に形成されているが、ただ用いられた礫は拳大のものが少数組み込まれているものの、その主体は長さ4cm～5cmを測る小礫で形成され若干異なりをみせている。規模は長さ約180cm、幅約40cmと大きい。礫面はA-2区のものと同様、ほとんどが赤褐色に変色し、タール状物の付着が顕著で、遺構内とその周辺の床面までも赤褐色に変色が認められた。用いられた礫は大多数が砂岩の河原石であるが、角礫となつたものも少数混在していた。また、本遺構の周辺には人頭大の扁平な河原石（砂岩）が6個散在し、中には遺構南側に近接し大型の石皿1点が出土した。

II、遺物

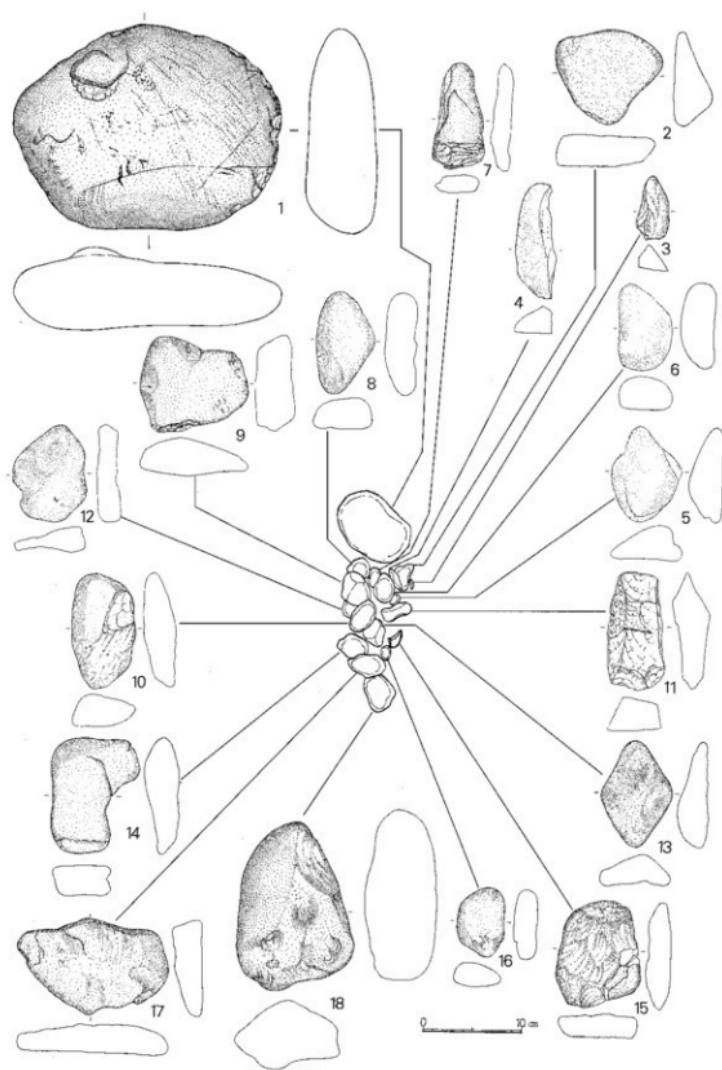
中世、近世の陶磁器片と縄文時代の土器片、石器などである。以下、中世、近世の遺物、縄文時代の遺物に分け解説する。

A、中世・近世の遺物

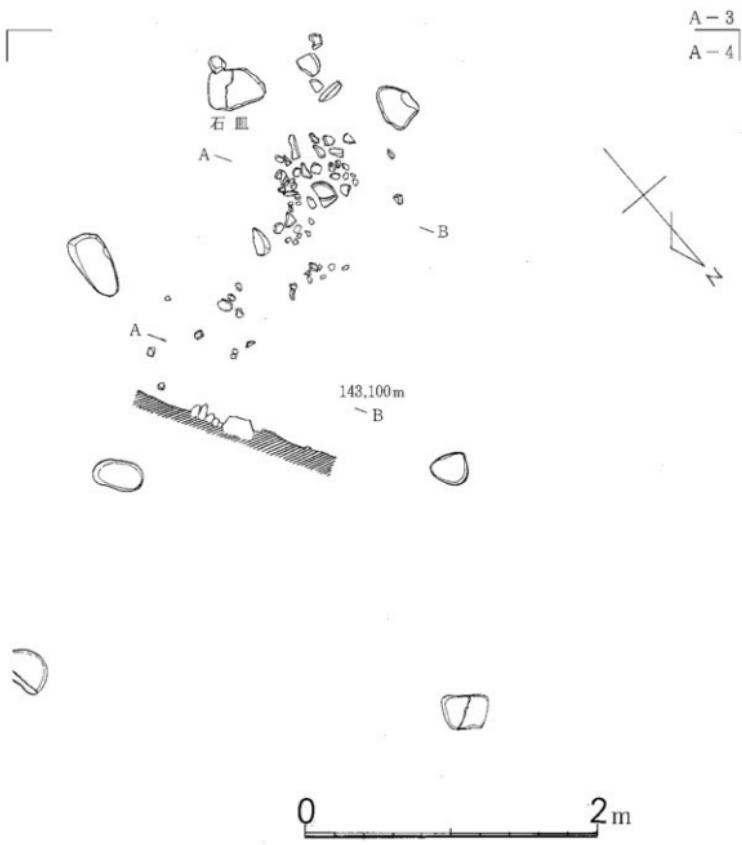
第1層水田粘土層中に出土するが、大部分はほ場整備事業に伴う工事によって攪乱された地表面に露出散在していたものである。総て破片で約50点得られているが、ここでは良好な資料35点を抽出し図示した。



第23図 A-2区検出の集石遺構実測図



第24図 車木遺跡A-2区検出の集石遺構礫実測図



第25図 車木遺跡 A-4区検出の集石遺構実測図

第2表 車木遺跡A-2区検出の集石造構礫(石)観察表

図番号	石質	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	備考
第24図 1	砂岩	27.5	21.0	7.2	5400	粗粒質、梢円形礫、上下面平坦。淡黄色。
2	砂岩	10.9	9.6	4.1	380	粗粒質、不整三角形礫、扁平。茶褐色、軟質。
3	粘板岩	6.3	3.1	2.4	50	不整長梢円形、淡青色。
4	砂岩	11.7	4.0	3.2	140	粗粒質、長梢円形角礫。淡茶褐色、硬質。
5	砂岩	9.7	7.1	3.5	210	粗粒質、不整菱形礫。赤茶褐色、硬質。
6	砂岩	9.0	5.6	3.3	220	粗粒質、不整梢円形礫。肉厚、黄茶褐色、軟質。
7	砂岩	10.6	5.4	1.8	130	粗粒質、不整長梢円形礫、扁平。灰茶色、硬質。
8	砂岩	10.4	6.0	3.2	220	粗粒質、不整梢円形礫、扁平。赤茶褐色、硬質。
9	砂岩	10.9	9.8	3.9	450	粗粒質、不整梢円形礫、肉厚。赤茶褐色、硬質。
10	砂岩	11.8	6.6	3.2	280	粗粒質、梢円形礫、扁平。赤茶褐色、軟質。
11	砂岩	12.2	5.9	3.5	300	粗粒質、長方形角礫、肉厚、両面平坦。赤茶褐色、硬質。
12	砂岩	9.9	7.2	2.6	210	細粒質、幅広不整円形、扁平。黄茶褐色、硬質。
13	砂岩	10.7	7.2	3.3	220	粗粒質、菱形礫。扁平、赤褐色、硬質。
14	砂岩	11.8	8.9	3.5	400	細粒質、不整長梢円形礫、肉厚。両面平坦、灰茶褐色、硬質。
15	砂岩	11.5	8.7	2.7	290	粗粒質、幅広梢円形礫。両面平坦、淡赤茶褐色、軟質。
16	砂岩	7.1	4.9	2.9	110	細粒質、梢円形礫。扁平、黄茶褐色、硬質。
17	砂岩	15.6	9.7	2.8	550	細粒質、不整梢円形礫。扁平、灰茶褐色、硬質。
18	砂岩	17.4	12.0	7.5	1260	粗粒質、不整梢円形礫。肉厚、灰茶褐色、硬質。

(第26図1~7)は輸入陶磁器片である。(1)は中国(華南)産の白磁の皿であろうその口縁部片である。器壁は外反氣味に強く外傾させ、尖り気味の端部をなす。時期的には13世紀後~14世紀のものであろう。(2~6)は絶て龍泉窯の青磁である。(2~5)は碗で(5)のみ胴部片、他は口縁部片であり、(2)は13世紀後~14世紀前に該当し、外面には鎬蓮弁文がみられる。

細線刻蓮弁文が施されている（3～5）と（6）の稜花皿口縁部片は、共に15世紀後～16世紀前の中世におさまるものである。これら青磁内外面の色調は黄緑色、青緑色を呈し、胎土は灰白色、（6）には貫入をみる。（7）は青花の碗の胴部片で、外面には草花文が描かれている。特徴から景德鎮窯系とみられ16世紀末～17世紀初頭のものと思われる。ちなみに（1）の推定口径11cm、（2）は19cm、（3・4）は13cm、（6）は12cm、（5・7）の胴部径は前者が10cm、後者は14cmを測る。

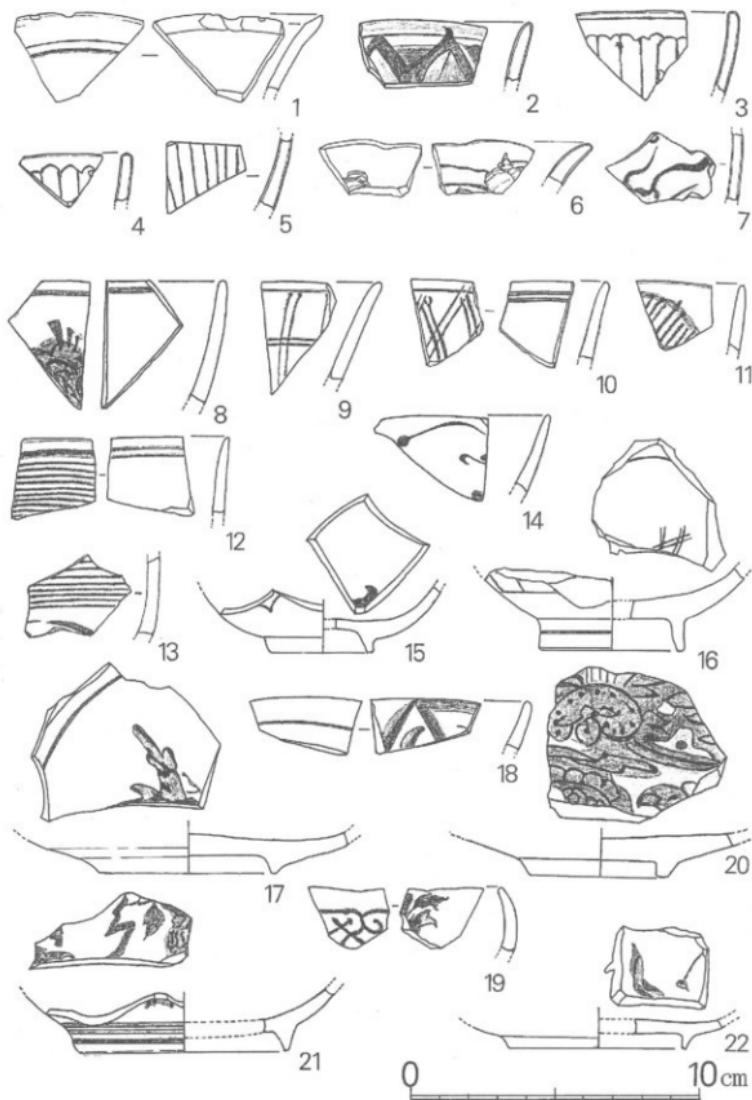
以上が中世の遺物であるが、（8～22）、（第27図1～13）は近世あるいは、それ以降のものまでを含む資料である。まず（第26図8～14・16）は肥前系の染付の中碗である。（8）は口縁部片で推定口径10cmを測り、外面に草花文が、（9・10）の口縁部片は共に端反形を呈し、外面に格子文が描かれている。共に推定口径10cmを測る。（12）の口縁部片と（13）胴部片は一個体のもので前者同様端反形を呈し、外面には多重線文と草文がみられ、口縁部の推定口径11cmである。（11・14）は丸形で、前者の外面には丸文、後者には草花文が、（16）の見込みには井桁文が描かれている。（11・14）の推定口径9cm、（16）の底径5cmを測る。（15）の肥前系染付は小碗で、文様は不明。（第26図17～22）も肥前系の染付で、総て小皿である。（17・20・21・22）は底部片で、（17・20・22）の内面には草花文がみられ、（17）の底部は基盤底を呈する。なお、（17）の底径6cm、（20）は5cm、（22）は6cmである。（19・21）は同一個体で、これの口縁は輪花形を呈し、内面には草花文が、外面には如意頭連続唐草文が描かれている。推定口径12cm、底径7cmを測る。時期的には（8）が1780年～幕末、（9・10・12・13）は1820年～幕末、（11・14）は18世紀代、（16）は19世紀～幕末、（15）は不明。（17）は17世紀前半～中葉、（18）は幕末以前、（19）は18世紀～幕末、（20）は17世紀、（22）は19世紀～幕末のものである。

（第27図1）は肥前系染付の小杯で推定口径7cmを測り、外面には笠文が描かれている。同図（2）は肥前産白磁の菊花形を呈する紅皿で、型押整形され、外面下半は無釉となっている。推定口径4cm、器高1.6cm、底径1.6cmである。（8～11）の底部片は（9）が関西系の鉄釉陶器の小皿で、鉄釉施釉され、見込みは蛇の目釉、白化粧土を刷毛塗りされ高台は無釉である。本資料は、特徴から能茶山産の可能性が高い。時期的には（1・2）が18世紀～幕末、（9）は1820年～幕末のものとみてよい。（10）は灰釉丸碗、白化粧土施釉後、灰釉を上掛けする。（11）は白磁の瓶で、（10・11）は共に近世に属するものであるが、产地は不明。同図（3～7）は器形、絵柄、器質などから明治以降あるいは現代のものと見られ、产地は明らかでない。（12・13）は擂鉢の口縁部片であるが、前者は产地、年代不明。後者は関西系、堺産とみられ、口縁内面の擂目上端を横撫する特徴を有する。18世紀～幕末とみてよいであろう。

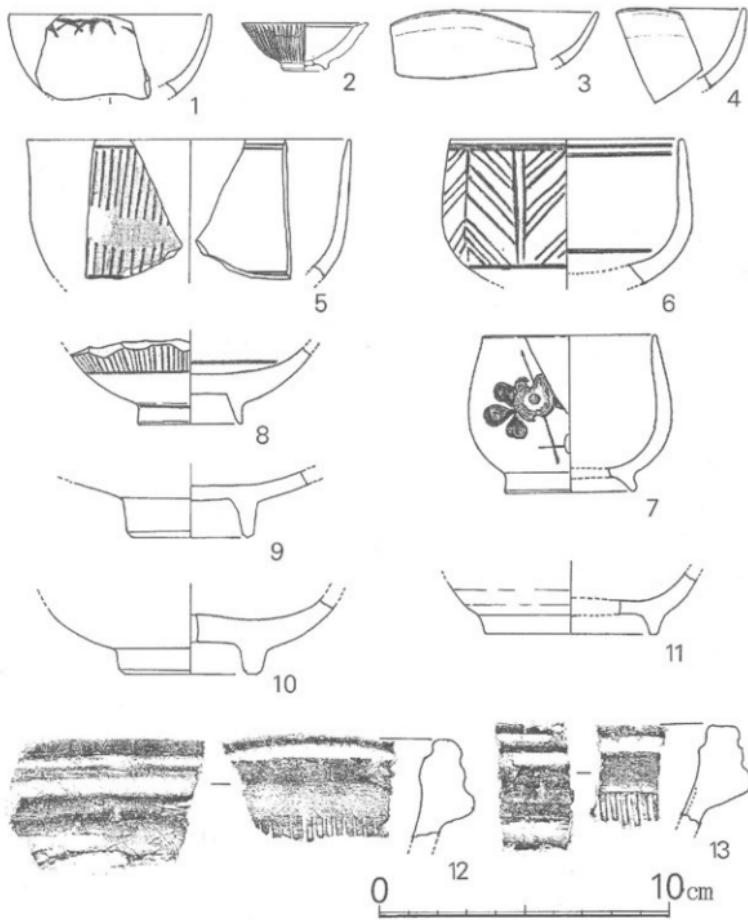
B、縄文時代の遺物

土器と石器がみられ、自然遺物の出土はない。主体をなすのは石器で土器は極少。これらの遺物はA-1区～A-4区までにはば満遍なく出土したが、中でもA-1区とA-2区に集中して見られた。

土器、石器は共に第2層アカホヤ火山灰土層中に最も多く、さらに第3層からも微量の土器



第26図 車木遺跡出土中世・近世の遺物実測図



第27図 車木遺跡出土近世の遺物実測図

片の出土が確かめられた。第4層には1点の打製石斧、2点の石錐と石器剥片が出土している。なお、第3層～第4層から出土の石器剥片については（第18図～第21図）に図示しているとおりであるが、以下に述べる遺物についても出土層位と地区、地点についてを同図に明記している。以下、土器と石器について述べてみよう。

1. 土 器

土器は破片で30点余り出土しているが、どれも細片で良好な資料に乏しい。ここでは微細な破片資料を除く22点を図示した。それらは無文、刻み目、条痕文、刺突文の4種に分けられるが、無文の類以外は總て第2層アカホヤ火山灰土層からの出土によるものである。

(a) 無文土器（第28図1～7）

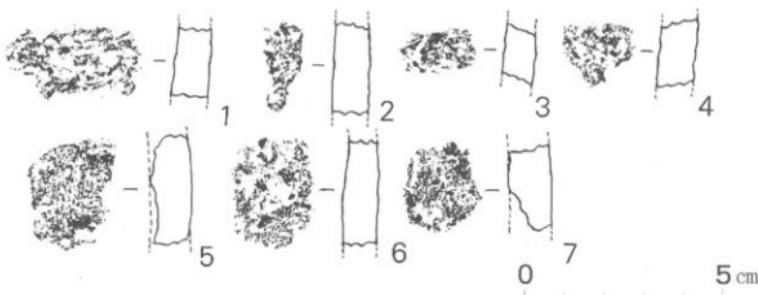
深鉢の胸部部7点をみると(1～4)はA-2区、(5～7)はA-4区の第3層より出土したものである。器質は大変脆く、水洗が出来ないほどである。これらは細片となっているが、A-2区のもの、A-4区のものも1点の土器片であったものが、土を落とす段階でA-2区のものは4個に、A-4区の資料は3個に破損したもので、本来は各1片づつの破片であったものである。それらは接合できなくなり、ここでは割れたままの土器片を図示している。7点を数える土器の器厚は1cm前後のやや厚手で、わずか膨らみを示す。内外面は撫でにより滑らかな器面を呈し、胎土中に細砂粒が混入され、暗茶褐色を呈する。

(b) 刻み目文土器（第29図1・2）

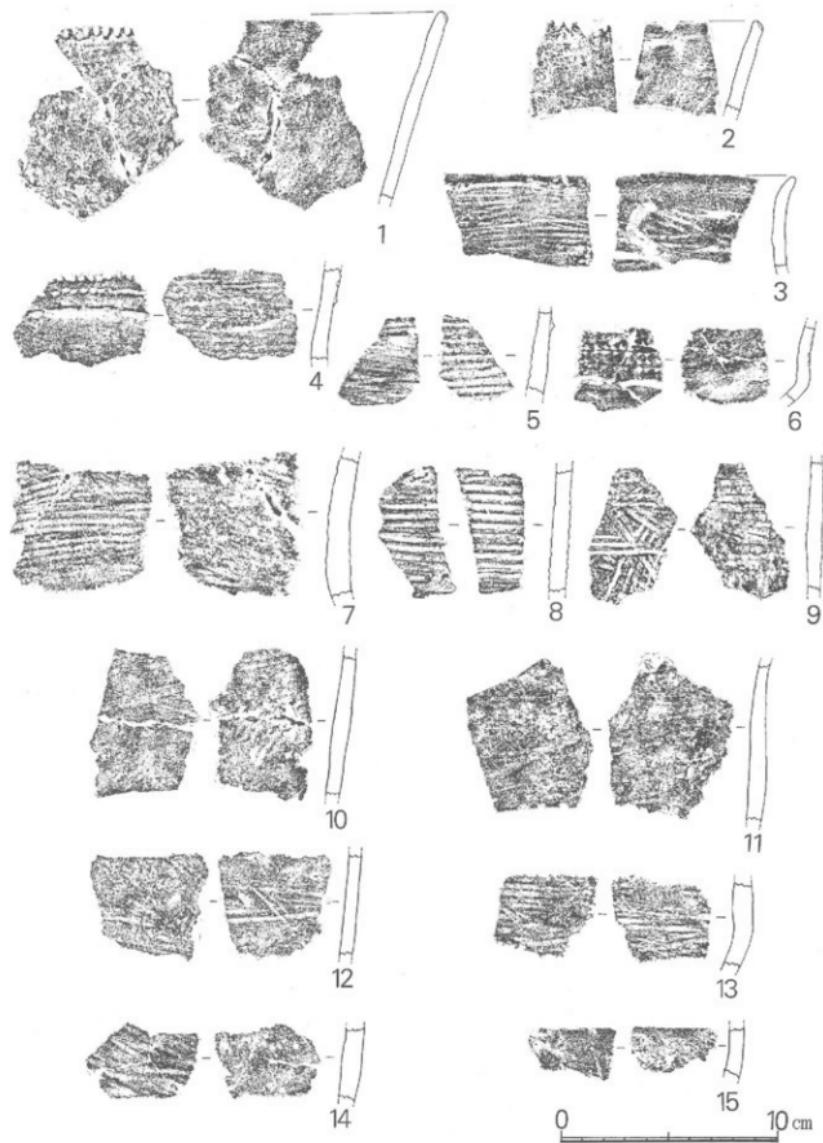
深鉢の口縁部片2点で、共にA-2区より出土したものである。推定口径は(1)が31cm、(2)は30cmを測り、両者は平口縁を呈する。直線的に延びる器壁は外傾させ器厚は0.6cmとやや薄手で、口縁端部は尖り気味に丸みを持たせている。内外面は条痕整形され、その後を入念に撫で調整され滑らかな肌となっているが、一部に下地の条痕調整痕をかすかにとどめる。特徴とする刻み目は(1)が口縁端部の側面に、(2)は端部にみられ、前者は小刻みに、後者はやや大ぶりに連続施文されている。

(c) 条痕文土器（第29図3～5・7～15）

主体となる土器で12点を図示しているが、總て深鉢で(3)のみ口縁部片、(4・5・7)が頸



第28図 車木遺跡出土土器拓影



第29図 車木遺跡出土土器拓影

第3表 車木遺跡出土土器観察表

図 番号	出土地区	器種及び 破片部位	推定径 (cm)	器面調整・色調		胎 土	焼成
				外 面	内 面		
第29図 1	A-2	深鉢口縁部	31	暗茶褐色、撫で滑らか。	黄褐色、撫で滑らか。	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
2	A-2	深鉢口縁部	30	黒褐色、撫で滑らか。	黒褐色、撫で滑らか。	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
3	A-1	深鉢口縁部	23	暗茶褐色、横位条痕	赤茶褐色、横位条痕	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
4	C-4	深鉢頭部	44	黒褐色、浅目横位条痕	黒褐色、浅目横位条痕	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
5	C-4	深鉢頭部	32	黒褐色、横位条痕	黒褐色、横位条痕	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
6	表 採	深鉢胴部	24	黄褐色、横撫で滑らか。	黄褐色、横撫で滑らか。	長石粒、細砂粒	不良
7	A-1	深鉢頭部	38	黄褐色、スス付着、横位条痕	黄褐色、スス付着、横位条痕	長石粒、大粒砂	不良
8	C-4	深鉢胴部	30	黒褐色、横位条痕。	黒褐色、横位条痕	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
9	表 採	深鉢胴部	18	暗茶褐色、交差条痕	黒褐色、横位条痕	長石粒、石英粒、細砂粒	良好
10	A-2	深鉢胴部	27	黄茶褐色、浅目横位条痕	暗茶褐色、スス付着、浅目横位条痕	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
11	A-2	深鉢胴部	30	黄褐色、浅目横位条痕	黄褐色、浅目横位条痕	黒雲母粒、細砂粒	良好
12	A-2	深鉢胴部	28	茶褐色、浅目交差条痕	黒褐色、浅目交差条痕	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好
13	A-1	深鉢胴部	22	黄茶褐色、横位条痕	黄茶褐色、横位条痕	長石粒、金雲母粒、細砂粒	良好
14	表 採	深鉢胴部	38	茶褐色、斜行条痕	黄茶褐色、横撫で滑らか。	長石粒、細砂粒	良好
15	A-2	深鉢胴部	35	黄褐色、撫で滑らか。	黒褐色、撫で滑らか。	長石粒、黒雲母粒、細砂粒	良好

部片、他は胴部片である。(3)の口縁部片の推定口径23cmを測り、端部は外反させ尖り気みに丸くおさまり、両面には条痕を横走させている。(4・5・7)の頭部片は器壁がわずかに外反し、共に内外面には横走する条痕を残し、(4・5)の外面には横位に背の低い断面三角形を呈する隆帯文をみる。この隆帯文は、おそらく数段巡らされていたものと思われるが、本資料には1条が残されている。(5)は貼付された隆帯文の一部が剥落している。(4)は小さな円形刺突文が隆帯文の上側に2段平行し連続施文されている。これの外面は、条痕を撫で消し平滑な肌を呈している。なお、これの推定径は44cmを測り大型である。(7)は器厚1cmを測る厚手である。(8)の胴部片は器壁が直立し、内外面に残る横走す条痕は筋が太く深く施されてい

る。(9)も器壁は直立し、太い筋の条痕を残すものの外面にみる条痕は複雑に交錯し特徴的である。(10~15)の胴部片は、(11・13・15)が緩く膨らみを持ち、(10・12・14)は直立させている。これらの内外面にみる横走さす条痕は浅く、中には斜行させた(14)のようなものも含まれている。なお、本類の胎土中には黒雲母粒を混入させたものが9点も含まれている。

(d) 刺突文土器 (第29図6)

1点の資料で、深鉢の頸部から胴部にかけての破片である。頸部は緩く外反して立ち上がり、胴部は「く」字状に内折させている。内折させた胴部からは、たぶん急斜し底部へと移行する器型を呈していたものと思われる。頸部外面には特徴となる2列単位の刺突文が連続施文され、その刺突文は右に開口する小さな「C」字状文である。器壁は0.6cmと薄手で、内外面共に黄褐色を呈し、器面は滑らかである。

2. 石 器

石鎌、楔形石器、石錐、打製石斧、スクレイパー、叩石、石材核、石皿などと多数の剥片がある。剥片の中には姫島産黒曜石とサヌカイト片が含まれている。

(a) 石 鎌 (第30図1~14)

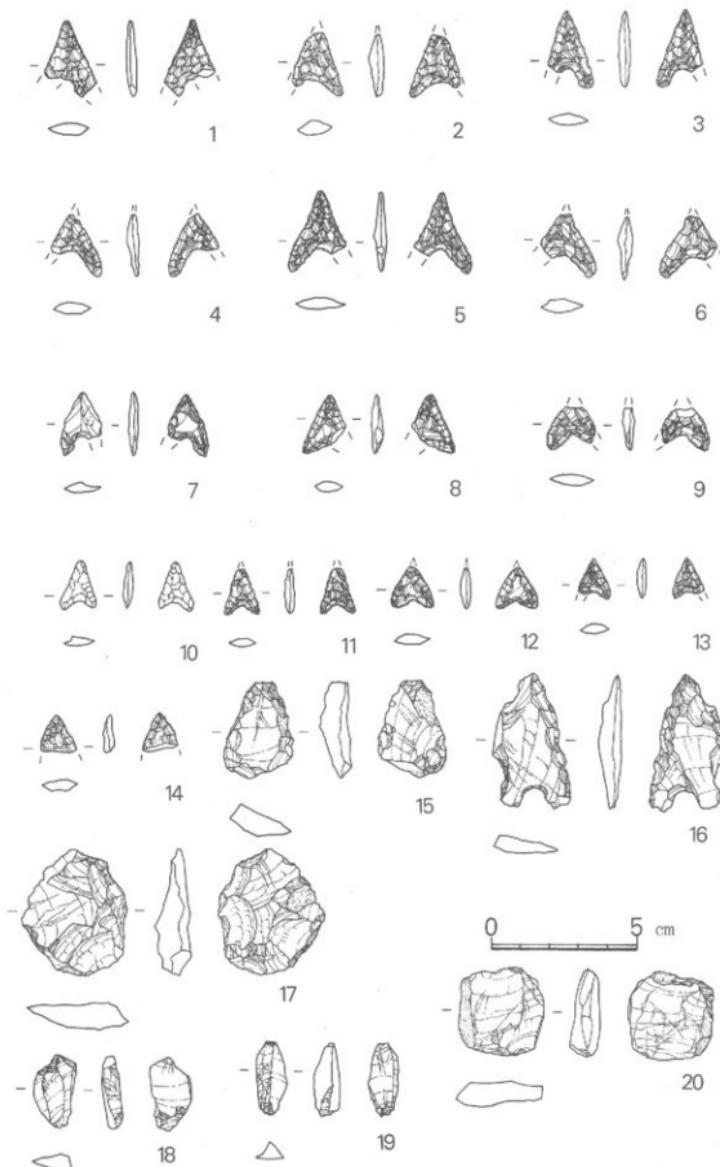
14点の石鎌は大部分が片脚、先端を欠損するもので完形品は極少。基部は総てのものに抉入を持つ。それらは形態から1式と2式の2型式に大別される。

1式石鎌、基部抉入の深い二等辺三角形を呈する大型鎌である (第30図1~6)。

6点は、一辺の長さ2.5cm前後を測るもので、両側縁は直線状をなすもの (1~3)、(4~6) のように緩く外湾するもの、(5)の内湾さすものなどをみる。押圧剥離による加工はどれも入念で、精巧にできている。脚端は (2・5) が鋭く尖り、(3・4・6) は丸みをおび鈍端で太い脚部が特徴である。また、本式は肉厚である。ちなみに(1)は第4層、(2・4)は第3層、(5・6)は第2層より出土した。石質は (3~6) までの4点が姫島産黒曜石製で、他は頁岩製である。

2式石鎌、小型の二等辺三角形鎌である (第30図7~13)。

7点は一辺の長さ1.5cm前後を測るもので、基部にみる抉入は山形状を呈し浅い。押圧剥離による加工は総体的に粗く、(7)は身の中央部に第一次剥離面を幅広く残す。中には(8)のように入念で精巧な作りのものもある。脚端は鋭く尖るものが多いが、(12)は鈍く、(9)は両側縁を外湾させ、太い脚部を作出している。(14)は基部を欠損し形状は不明。本式の石質は(14)のみチャート製で、(8・9・11・13)が姫島産黒曜石、(7・10・12)はサヌカイト製である。出土層位は(8)が第2層、(10・13)は第3層、(9)は第4層から出土したものである。なお、(15~17)は尖頭状石器または石鎌の未製品と思われる。(15・17)は両面中央に第一次剥離面を幅広く残し、加工も粗く歪みがあるなど完成品とはなっていない。(16)も中央両面に第一次剥離面を幅広くとどめ、側辺にみる加工は粗雑で片側面中央に打面をそのまま残している。た



第30図 車木遺跡出土石器実測図

だ、これの片側縁は両面からの押圧剥離による加工が粗くではあるがなされており、見方によつてはスクレイパーとして使用された可能性もすてきれず、問題を残す資料であるが、ここでは一応、石鎚未製品として取り扱った。本資料はサヌカイトを素材とし、(15・17)は頁岩製である。

(b) 楔形石器 (第30図18~20)

3点がみられ (18・19) は縦長剥片を素材とした良質のチャート製で、身幅が狭く柱状をなし(19)の断面は三角形を呈する。前者の打点部には小剥離痕が粗く残り、後者は下端刃部につぶれがみられ、上端部には小剥離痕が認められる。(20)は漆黒をなす良質の頁岩製で、身の長さの割に幅広く、上下両端部につぶれが粗く認められ、特に上端部には小剥離痕が顕著である。なお、本資料の片側面には幅狭く自然面をとどめている。

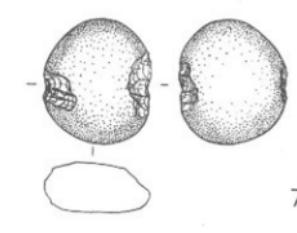
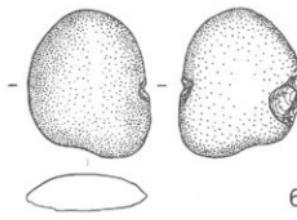
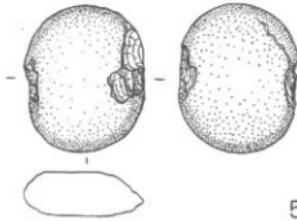
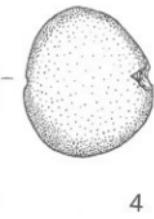
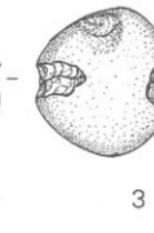
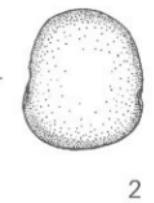
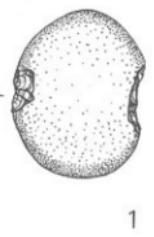
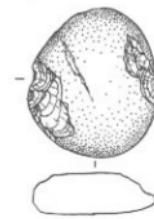
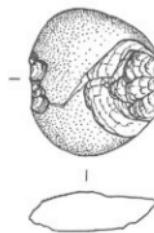
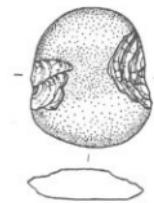
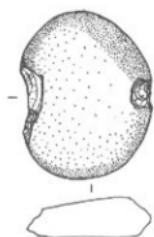
(c) 石錘 (第31図1~7)

7点の石錘は (1~3) がA-1区、(4~6) はA-2区、(7)はA-3区の第2層アカホヤ火山灰土層中より出土したものである。石質は砂岩で、梢円形を呈する扁平礫を素材とし、紐掛けとする凹みは総て短軸両側面に粗く打ち欠きによって施されている。最大が長径4.85cm、重量28g、最小は長径3.62cm、重量20.5gである。これらの平均重量は23.14g、長径平均4.22cmを測り、本遺跡の石錘は総体的に河川型の中でも小型の部類に入る。

(d) 打製石斧 (第32図1~4)

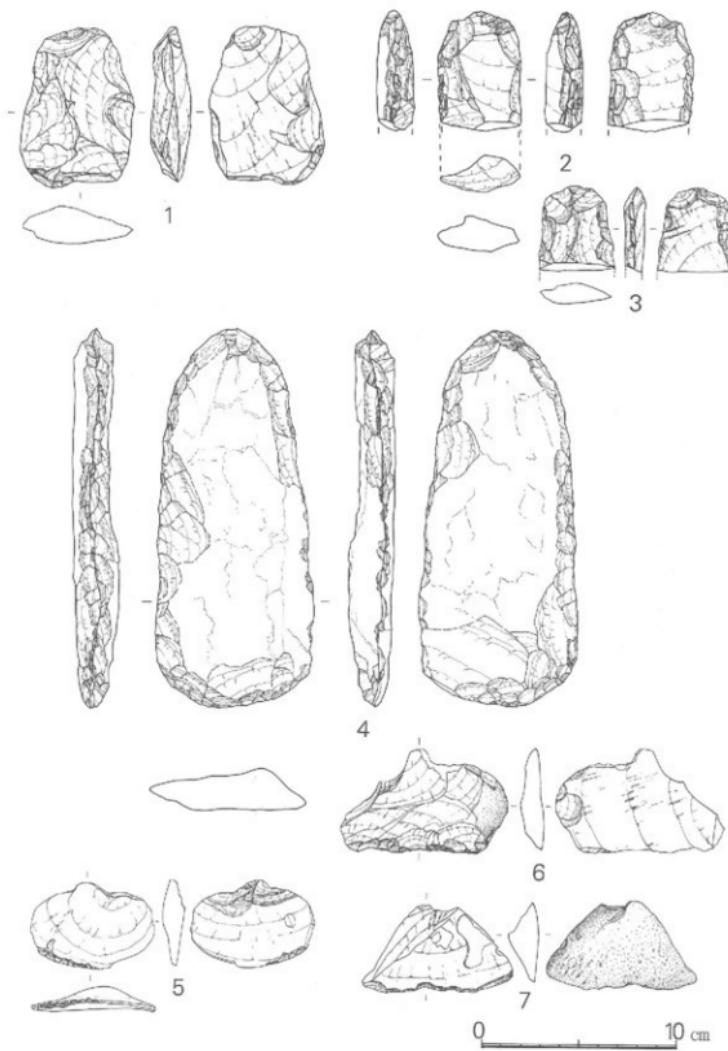
4点がみられ、完形品2点、他の2点は頭部の残片で、総て頁岩製である。(1)はA-1区の第4層より出土し、本遺跡出土遺物中、最深部より得られたものである。最大長8.1cm、最大幅5.65cm、最大厚2.0cmを測り寸詰まりとなった完形の小型品である。頭部はやや幅広で、刃部へと向い徐々に幅を広め、刃部は水平気みに調整され鈍い刃先を作出している。全体的に打ち欠きによる調整は粗く、両側縁より施された大きな剥離面を全面にとどめる。この片面中央には緩やかに盛り上がる棟が作出され、一方の面は扁平で、側面は若干湾曲している。なお、本資料は水洗の段階で表面が薄く溶け、一見磨耗した状態となっている。

(2~4) は第2層より出土したものである。(4)は完形で、しかも本資料は長径19.4cmを測る大型で、見事な打製石斧である。板状をなす原礫面を中央の両面に幅広くとどめ、周辺に粗く打ち欠き加工を施し、その後、細かく調整加工し形状を整えている。大きさの割に肉薄く扁平で、側面は真直ぐ伸び、頭部は尖り気みに作られ、刃部は緩く外湾させている。なお、この刃先は丸みを帯び鈍端で、全体形は幅広の楔形を呈し、全面にアカホヤ火山灰土が染み付き黄茶褐色をなす。(2・3)の頭部残片は、後者がA-3区出土で、前者は表採によるものである。共に身幅は狭く、しかも両側縁が直線的であることなどから、本資料は短冊形を呈していた可能性が高い。前者は中央両面に幅広く第一次剥離面を残し、周辺部に粗く打ち欠きによる調整剥離痕をとどめる。後者も片面の中央部に第一次剥離面を幅広く残し、一方の面には粗



0 5 cm

第31図 車木遺跡出土石器実測図



第32図 車木遺跡出土石器実測図

く打調された剥離痕を全面にとどめ、前者は分厚く、後者は肉薄く扁平である。

(e) スクレイパー（第32図5～7、第33図1～6、第34図1・2）

11点のスクレイパーは総て頁岩製で、横長、縦長剥片を素材とするが、その割合は前者が勝り、大きさにばらつきがみられる。出土はA-1区に最も多く、次いでA-3区とA-4区に、A-2区からの出土は極少。これらの出土層位は（第32図6・7）、（第33図2・5）は第2層に出土したものである。（6・7）はやや大型で、前者は分厚い縦長剥片、後者は横長剥片を素材とする。前者は素材剥片の長軸一辺に直線的な刃部を片面加工によって作出し、片面には粗く打ち欠いた調整剥離痕をとどめ、その一部に自然面をとどめている。これの一方の面は第一次剥離面をそのまま残す。後者は三角形状を呈する横長剥片素材で、長軸の一辺に片面から押圧剥離を加え大きくジグザグ状となる刃部を作り出し、片方の全面には自然面をとどめる。

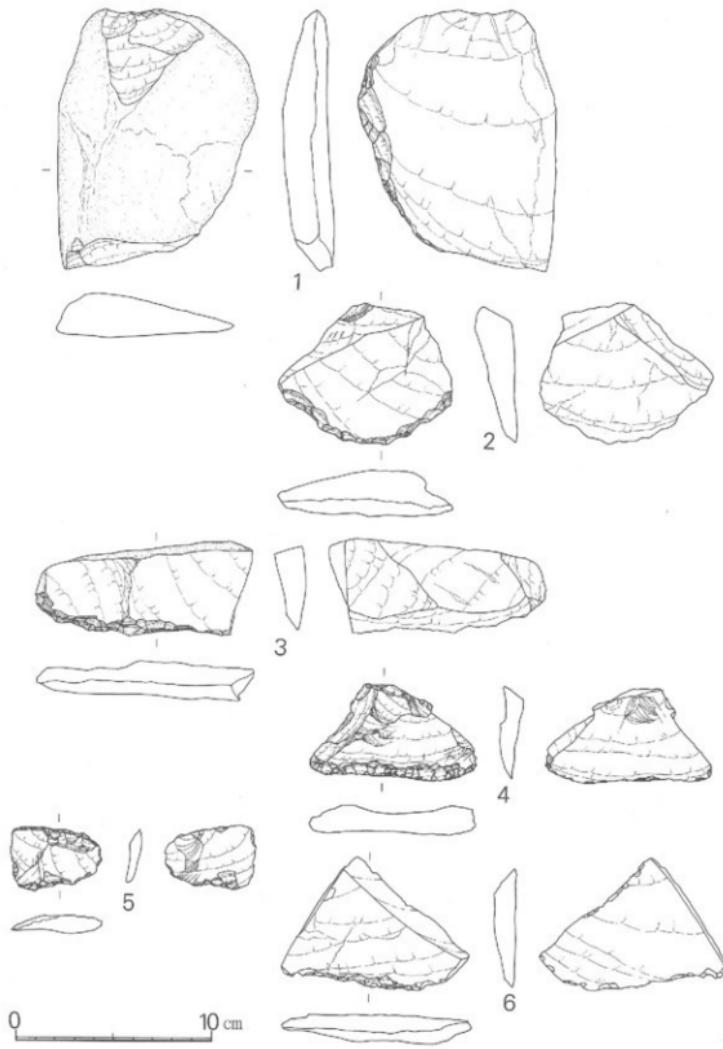
（第33図2）は分厚な横長剥片素材で、背部に幅狭く平坦打面をそのままとどめている。全体形は不整三角形状を呈し、両面に第一次剥離面を幅広くとどめ、長軸一辺に粗く押圧剥離を加え外湾する刃部を作出している。なお、これの刃部調整は片面からなされ、刃部角55度と急斜させている。同図(5)は小型の肉薄い横長剥片を素材とし、全体形は不整橢円形を呈する。これらの背部は入念に調整され直線状を呈し、一方の長軸一辺に片面から粗く押圧剥離を加え鋸歯状となる刃部を形成する。

（第32図5、第33図1・3・4、第34図1）の5点は第3層出土である。（第32図5）は肉薄、小型の横長剥片素材で打点となる面を背部とし、一方の長軸一辺に片面加工によって細かく入念に押圧剥離を施し直線状となる刃部を形成している。

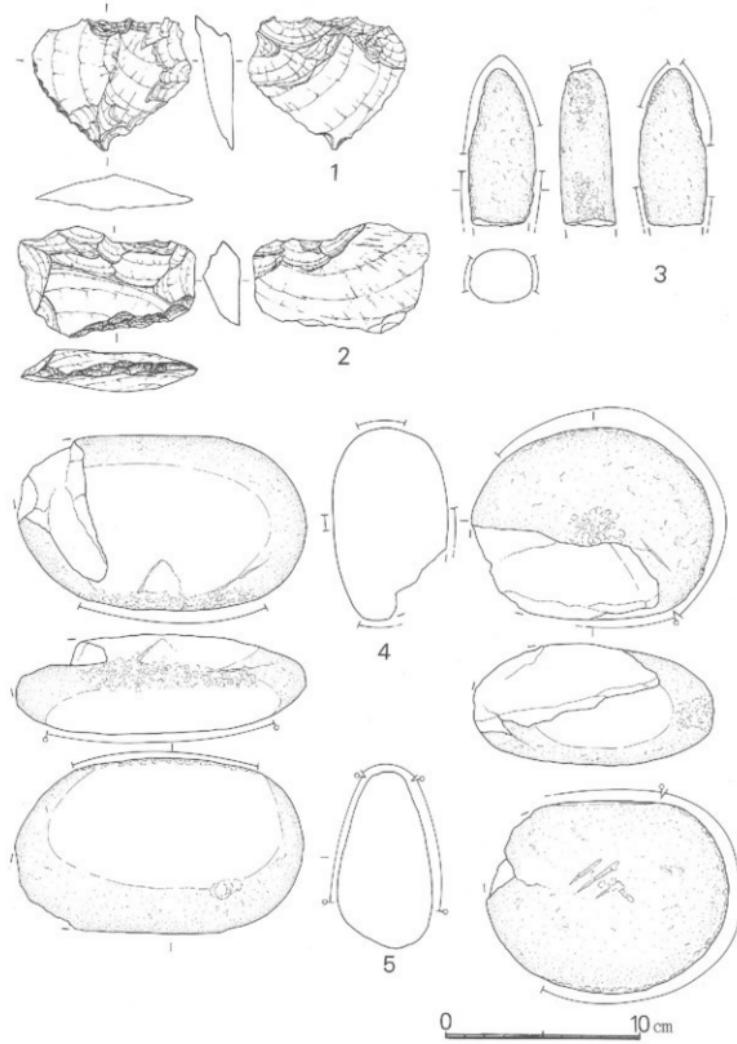
（第33図1・3・4）は大型タイプに属し、(1)は長さ13.4cm、幅10.3cmを測る超大型である。大型分厚い縦長剥片素材で、長軸片側面に片面から粗く押圧剥離を加え銳利な刃部を作出している。この片面には自然面を幅広く残し、一方の面には第一次剥離面をそのままとどめ、刃縁は緩く外湾する。(3)も分厚い大型の縦長剥片素材で、両面に大きな剥離痕をとどめ、長軸の一辺に粗く片面加工によって直線的で長日の刃部を作出している。これの背面部には自然面を幅狭く帯状にとどめている。(4)は珪質頁岩製で表面は乳白色を呈し、分厚な横長剥片を素材とする。全体形は三角形状を呈し、背部に幅狭く平坦打面をとどめ、長軸一辺に片面からの入念な押圧剥離によって銳利な刃部を作出している。なお、これの刃縁はわずかに内湾させている。

（第34図1）は不整三角形をなす分厚な剥片素材で、背部は粗く打調され、直線状をなす。刃部は、長軸の片側面に浅く押圧剥離が加えられ、緩く外湾する刃縁を形成し刃先は銳い。

（第33図6、第34図2）は表採による資料で、前者は扁平な横長剥片を素材とするもので、三角形状を呈し、長軸の一辺に片面から粗く押圧剥離を加え緩く外湾する刃部を形成する。後者は分厚な横長剥片を素材とし、全体形は不整長方形を呈し、長軸一辺に片面加工によって直線状をなす刃部を作出し、背部は打ち欠き調整され、大きな剥離痕を両面に粗く残す。



第33図 車木遺跡出土石器実測図



第34図 車木遺跡出土石器実測図

(f) 叩 石 (第34図3~5)

3点がみられ、(4)がA-1区の第2層出土で、他は表採によるもので、石質は総て砂岩である。(3)は棒状礫を素材とするもので、片端部を欠損している。使用痕は両側面と先端部にアバタ状痕となって残り、その痕跡は先端部側の側面に強く、激しい使用によって先端部は尖り気味に痩せ細っている。

(4・5)は長径10cmを越す分厚な楕円形礫を素材とし、前者は礫の平面中央部の両面と側面に使用痕がみられ、特に側面の使用痕は激しく平坦面を形成する。後者は、アバタ状となる使用痕を側面のみに残し、礫の上面は滑らかに摩耗し、本資料は磨石としても兼用されている。これらは共に激しい使用によって前者は側面部、後者は先端部を大きく欠損している。

(g) 石材核 (第35図1~3、第36図1~5、第37図1~6)

14点の石材核は、その半数以上が当初設定していた調査区内で表採されたものである。出土層位の明らかな(第35図1)がA-1区の第3層、(第37図1・6)が共にA-3区の第4層、同図(2)はA-2区の第2層から出土したもので、石質は総て頁岩である。

(第35図1~3)は石材核の中でも最も大型のもので、長径13cm、幅10cm前後を測る。全体的に大きさの割には扁平で、どれも片面に自然面を幅広くとどめる特徴を持つ。(1)は縁辺を打面とし、石材核片面の全面に大きな横長剥片剥離痕をとどめる。(2)は大きな剥離痕を片面に単純に残し、剥片剥離の進行していない資料。(3)は片面に大型の剥片剥離痕を全面にとどめ、打面を長軸の両端部と両側面に持ち、縦長、横長剥片共に剥離されている。なお、これの一方の面には片側面からの打撃によって1枚の大型横長剥片剥取痕を残す。

(第36図1~4、第37図1~3)は、長径10cm前後の円状または四角形、不整三角形状となる中型のもので、本遺跡出土の石材核で主体をなすタイプである。多数のものの片面に大型タイプ同様、自然面を幅広くとどめている。(第36図1)は分厚く、不整三角形を呈し、その三面に粗く、しかも激しく剥片剥離痕を両面にとどめる。同図(2)は扁平で不整三角形状を呈し、2面に打面を持ち、やや大型の剥片剥離痕を片面の全面に粗くとどめ、一方の面にも剥片剥離痕をみる。同図(3・4)は不整円状を呈し、打面を石材核の縁に持ち、転移しながら剥片剥離を行ったもので、石材核の全周に小型の剥片剥取痕をとどめている。

(第37図1・2)は共に自然面をどこにも残さぬもので、全面に剥片剥離痕をとどめている。前者は不整四角形を呈し、側面の縁辺に打面を持つ比較的大きな剥片剥離痕を残す。後者は長目の不整三角形をなし、長軸の片端と片側面に激しい打撃が加えられ、その面にやや太目の剥片剥離痕を見る。(第37図3)も不整三角形を呈するが、これは肉薄く扁平で、片側面に自然面を細長く残している。剥片剥離は石材核の縁を打面とし全周に打撃を加え、両面に大きな剥片剥離痕をとどめる。

(第36図5、第37図4~6)は長径6.5cm前後の小型のもので、円状を呈し、総て分厚い。これらは比較的入念に剥片剥取され(6)のみわずか自然面をとどめる。本タイプは石材核の縁を打面とし回転させながら剥片剥離がなされ、石材核両面のほぼ全面に小型の剥片剥取痕を残し